古事記四之巻

伊吹廼屋先生講本

門人

武藏國　大野尚芳
上總國　弓削春彦
下總國　宮内嘉長

根岸信輔氏寄贈

同

○次ニ常陸國下總國ハ方ニ向ヒ右の如く拜みて。

吾妻國乃三社登稱辭竟奉留。常陸國鹿嶋郡鹿嶋宮爾鎮座坐須武甕槌神下總國香取郡香取宮爾鎮座坐須經津主神常陸國息洲社爾鎮座坐須岐神能御前袁慎美敬比畏美畏美毛遥爾拜美奉留。

鹿嶋香取の宮は古へ。神名式ニ。常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮。名神

大月次新嘗。下總國香取郡香取神宮。名神大月次新嘗。をつかさどる。二宮とも申す神世よりの勸請なるなり。古史傳に委く說くを見ぬ。抑この二神の生出はせる本は。伊邪那岐大神。かの火産靈神を斬給ひし時に。その御刀の刃ゝより垂落る血。天に激上りて。安河原なる石群と化れるに。また其鋒より垂落る血。その石群に激ばきて。磐裂神根裂神と申す男女二柱の神成出ましし。此二神の子に。磐筒之男磐筒之女神と申す二柱ありて。香取宮にはゝ經津主神なり。即その子なりゝ。此時に。伊邪那岐神の御刀の鐔より垂落る血も。その石群に激ばきて。甕速日神と申す神成出ましし。其子に。熯速日神と申す神ありて。鹿嶋宮にはゝ武甕槌之男神は。即その子なり。ゝは委くは古史第十五段の傳に說くを見べし。ちて伊邪那岐神の火産靈神を斬給へる御刀の名を。伊都之尾羽張神と申して。即伊邪那岐神の神德に成給ふ。現身の神に御坐ますを御刀と化して帶し給ふなり。武甕槌神。經津主神の出自を尋ぬれば。伊邪那岐神の御怒にまゝ斬れ給ひし火産靈神の御怒にふ因り。彼御刀の御靈と。火産靈神の血に化る磐石とに因りて生坐ふを有れど。別て云ふは。經津主神をむ紐火産靈神の血に化まして成ましし。武甕槌神はむ紐と彼御刀の御靈に因りて成坐ゝと。是をもて經津主神の御親神ゝ。

みな繁てふ諱を名ゐ賜まし。武甕槌神をむ。古事記ゐ伊都之尾羽張神の御子と云へア。深く心を彩りて思ひ辨ふべし。

ちて其伊都之尾羽張神を武甕槌神と共ゐ彼安河れ河上ゑ石窟ゐ籠ア居ませるを。後ゐ天照大御神皇産霊大神の御言をちて。皇孫邇〻藝命を。此御國ゐ天降し坐むと為給ふ時ゐ。八百萬神をめし集へて。葦原中津國を。いさく喧ぎて。悪神多うア。誰神を遣して平治めむと問給ひしうば。八意思兼神の語ゐ。伊都之尾羽張神の子。武甕槌神ちうる彦し。然れど彼神を。天安河れ水を逆ゐせき居れば。他神をも不得じ。天迦具神こそ往得めや白し給へば。其神を遣しけるゑ。尾羽張神畏まりて。武甕槌神を進れるゐ。經津主神と

共ゐ天降して。此御國の悪神どもを平しめ給へア。天迦具神と云ふを。即天ある鹿神ゐて。尾羽張神武甕槌神とも。其を変給ふ故ゐ。御使ゐ遣せるあり。鹿を古言ゐ迦具ゑ云へり。其を迦具土神の御骸れ化れる香山ゐ由ある称ゐ。其由を霊の真柱ゐ加ゑ云へ。ゐを。ゐを委くは古史傳を見て知べし。常陸風土記ゐ武甕槌神を天上ゐて香島大神と称し。其坐し處を香島宮と號しを。此国ては豊香島宮ゑ名と云へるゐ思ふゐ。此も疑ある。鹿ゑ愛養ひ置給へる島ある故の名あり。是ゑも常陸の鹿島をも。古くは香島とも書て。カグシマゑ称へるゐと知ぬ。まゐ此ゐ准ずべ。香取をも。古くはカグトリゑ云ひしゑ知べし。然れど神代紀ゐ檝取とも書されでカトリゑ唱ふ。ゑ古語ゐカグゑもカトゑ云へれば。今も常陸の鹿島ゑ社地ゐ鹿の多うゐ。神の使者と称し。此御社を秘せる。奈良の春日社をカスガゑ云ふも。鹿栖所の義ゐ。有べき。其ゐはゆて香取の社地ゐは。鹿居らゑと云ふ。爰ゐ二思ひ依れる考へ。ゐれど。其説長ゐれ。此ゐ云はゑ。

柱神天降りて。まゐ大國主神を。皇美麻命ゐ。國遜ゐ讓ア給

ふ居く和し治免給ひ。大國主神の御勸めに從ひて。岐神を
鄉導と為て。螢火の如き光神。五月蠅なす荒振神どもを。神擾
ひ拂ひ。斬戮ひ殺ひ。國内盡く見廻ひ。磐根木立草葉青
水沫までも語言しむる妖鬼どもをも。皆悉く外國に追逐
攘ひて。葦原中津國を平竟殺る由を復命申さむと白雲に
乘ひて天に昇ひ給へる處に。常陸國信太郡あひ。是をもて
常陸國は武甕槌神の宮ありて。國は異れど間近く下總國は
經津主神の宮あり。抑国生坐る伊邪那岐大神は大正統と
坐ます。皇御孫命の降坐し。此国を
ろし看時しも。經津主神・武甕槌神は荒振邪鬼どもを討滅
免給へる事とは伊邪那岐大神の御稜威まに迎具ち神の
御稜威も。此時に至りて其驗れ顕れる
道理あることや深く其趣を味へ思ふ居し。然らば其荒振る

悪神どもは何して有初免まに其を逐ひ平ぎ給ふ。岐神を鄉
導ぎ為さるを。何の由ありと云ふ。其枉神らは成出し初
免は。伊邪那岐大神。豫美都國に往坐して。彼國の汚穢に
みを給ひ。伊邪那美神と互に御諍ひの事ありし謂に因て。
御裝束は穢物等より為て。陸地には長乳齒神。煩神。閒齧神
など生出で。海河には奥疎。邊疎など六柱の神生出しるが
初發ゆて。此事は古史第二十三段の傳を見て知べし。其末あびきて殺び
立しは。須佐之男神御荒びは時より始ひて。此時まで尚靜
まらぬ在しあひて其は水陸に生れる神等ある故に陸には
磐根木立。水には青水沫など。言問ぬ物をも音殺ひ立て喧

せし事あり。此事あり委くは古史第四十三條第百六條の傳あるとよ云ふを見て知るべし。斯て岐神は伊邪那岐神夜見よりめり還り給ふ時ふ伊邪那美神まづ八種の豫母都醜女あど追奉れるを甚く悪み嫌ひ給ひて彼豫母都平坂ゆて此處より莫經と詔ひ杖を衝立給ひしのば然所思ませ風御靈れ凝りふ古れ岐神生坐さり此謂まふ因りて此神かの夜見國より屬さる物をば盡く逐ひ給ふ御功あり。まづ夜見國の穢ふ因りて生出ある妖神は。いまく岐神を恐るゝ謂有るゝ故ゑ大國主神この神を二柱神ふ薦めて鄉導とせゝ免給ふるあり。あり此事は第十六・紐塞神等詞ふ云ふを合せ考ふべし。ちて此武甕槌神。經津主神。それ生坐せ風本因は更あり。其事蹟もと上ふ云ふ如く正ゑ二神ふ御坐せど異きりも奇妙りも。此二神まづ御體を合せて一神とも御坐せり。是を以て古事記ふは武甕槌神の亦名ふ健布都豊布都あど申れ御名ありて別ふ經津主神といふは無あり。然れども此れ二柱ふして。一柱れ如く。一柱りも思ふる。ふ二柱りて。其差の髣髴し紀は或れ一柱と坐まし或は分りて二柱とも御坐れあり。幽き妙ある所以の風事あり。大凡古の大神はみあらぬ卓れて貴き神等ふ多くさる例の神ふ其を一ツ二ツ云はぐ風神金神あど正ふ男女二神ある風を一ツ數ふるふ始め和多都美神の生坐るハ三柱ふ坐るふ末ふは大綿津見神とも豊玉彦命とも云て一柱ある類あり。師れ古事記の傳をれみ紛て日本紀ふ二柱と風を捨ら れしとも。ど委くらぬ。あほ古史傳ふ精しく論へるふ見ぬし。

けて常陸國は大八嶋國の東の端にあるか。鹿嶋神宮は謂ゆる浪逆海を前にして。鳥居は西南に向て立てり。其拜殿を御假屋と稱して西に向ず。正殿を丑寅にかゝ
りて立あり。此は謂ゆる鬼門を降伏の爲なりと。此神宮の事を記せる社傳の古き書等に云へる。神世に幽き契なる事とぞ所思ゆる。抑これ社傳の記に鹿島大神の鬼門を守給ふと云へること諸舊れ大に係れ生心付
る輩を信ずるも有べし。其謂ある說に非ずそはまた於漢國にて古く此方を畏めるあり。史記の封禪書漢書の郊祀志などに東北神明之舍也と有るに注に神明者日也と云へり。日の出初むる方なる故に貴方とて避恐る
る趣に聞ゆれども。實は其謂のみに非ず。彼國太古より此方を鬼方と云ふ說なりし故に避恐れし事と聞えたり。其古說に黃帝書を云ふ古書に東海中に山あり。度索山と号ふ。其山に蟠桃とて大桃樹あり。其山より東北のかた門あ

り。鬼門と名く。万鬼の集まる所なるゆ故に天帝その度索山に神荼鬱壘といふ兄弟此二神を置て万鬼を制せしむと有る是なり。また周易に鬼方と云へるも此方なり。此は彼
国に傳へられる古傳なるゆ度索山に事を出雲の伊賦夜坂に事を彼
の事なりとそは大桃樹ありと云へるよりて知べし。斯て此伊賦
夜坂に夜見国に入る所なりと。其坂に塞神ありて。此處を惡事の往留まる處なりて。
八種の豫母都醜女など住る故に其坂に塞神ありて坐まして
守り給ふ事と武甕槌經津主二神の惡神妖鬼をうち鎭めて
逐ひ給へる古事に混雜しく其名を神荼鬱壘と傳へ誤れ
る說なるこを疑あき物なり。是を以て社傳の說に謂ある
事に非ずと云へり。然れど二神は妖神等を平け逐ひ給ふる狀を
國内盡く逐ひ平げ漸くに常陸國へ逐集め逐及まして。
此處の浦に逐て遂に外國の遠き境に逐ひし遣ひし故に。
此國邊に御靈を留め宮を造らしめて本體を天上に復命
し給ふ故にぞ有りける。其は神宮より五町ばかり東方に故

まて。謂ゆる要石と稱ふゞある處よりて。濱邊ふ塩宮と申れ
枝社ありて。正ふ東北れ方よ向ひ立とり。此を見目神也云ひ。
其邊の濱を見目の濱とも云ふ。序よ云ふ。要石のこと。彼社
云ふ。山宮と号れ。大神天降り給ひし時ふ。此石を御座せり
記を。石御座を。俗よ要石と
と云ふり。夫木集よ。光俊朝臣。尋う孫々ふ見れるふ千早
ぶる。御山の奥れ石のみやおしをと有りて。其まの詞書よ。
そ於くら詠で〳〵。尋ね見られし事までを記されとり。古
者れ訛ふ。神世よ鹿島大神。おれ濱よりとして。悪神邪鬼を異
國ふ却ひ給へる後ふ。塩宮神をおく〳〵ふ居せて。もし悪鬼の
還るおと有れば。速を大神よ告さし給ふ故よ。はる〳〵告神
とも云ふや言へり。但し社記ふ。おを高倉下命ふゆと有り。お
は覺束ふし。そは高倉下命を武甕槌神より布都之御霊劍
よ賜ちりし人りて。大神ふ由緒ふきふは非ざ

れども。其を神武天皇の御代れ事ふて。大神の御鎮り
坐せる當昔よは間遠りれ此は他神の御供
ふ從へる神ふらむも知べれむなり。然れを此は他神の御供
古奈比咩神社の相殿よ。其御子として。見月神。劔宮神と申れ
二神ありるよし。其旧記を見えとり。此を同神ゝ別神ふ知ら
ず。佛説十王經と云ふ物ふ。かの閻摩王れ廳中よ見目とい
ふ物と鏡臬を云ぬ物ありて。世人れ悪事を遠く見き〳〵て。
其王よ告るといふ妄誕を作れるは。此塩宮神れ事より思
ひ於きて。皇国の佛者れ作り風説と聞えとり。そは漢の天
竺の佛書ふもおは見聞せざる名ふ。そは常陸国の古れ方言よ。潮をいふと云
さ潮宮やも書く。そを常陸国の古れ方言よ。潮をいふと云
ひし故ふり。別よ潮來といふ地名ありて。風土記よ其由見
えとるふて知るべし。

けて此祠の前邊を。謂ゆる高間原ふ。鬼塚と
云ふ有りて。神世ふ大神。此原まで邪鬼どもを迫到めて。多
く斬散を給ふ。其骸を埋みとる所と語を傳へふ。高間原
云ふを。風土記よ。高松濱とある。略し云へるふり。然れど高
間原と云へるも古き事と聞えて。夫木集。光俊朝臣の哥ふも

ちう詠れたり。但し高千穂峯と云ふに就て。古事記・神代紀なる天神さちの御坐れる高天原を混じて。新井君美抄し
れ古史通・まゝ或問などいふ物をはじめ。種々云へる説ども有るは。論ふまも足らぬ愚説なりけり。さて其鬼
塚は高き塚なり。此原は大神の鬼を斬給へる所なれば其
血の流れたる所なりとて。砂原ふ血れ激れる狀ふ砂の赤
き所々あり。其赤砂を傍ふ取退れば。常の白砂となり。赤砂
なりし所ふ聚れる砂は。まゝかく染るとぞ云ふ。掘見る
ふ底より赤うなり。已さきの此を惟らく。続紀一卷ふ此
も底は朱砂なりて。かく染れらむと思ひしは。中々ふ殺意なりけり。水戸殿の常陸國誌ふ。土
人相傳ふ。鹿嶋明神ふの野ふ出て。外國れ鬼と戰ふ。群鹿
をもて卒伍とあり。明神利を得れば。群鹿きそひ追ふて風
塵あぐちふ海ふ入り。明神利を失へば。群鹿耳ふ垂れて直
ふ人家ふ入る。土人時々その事故見ると見え。今も時々そ
れ事なりと土人云へり。現世れ事をのみ諦しく思ふ輩か
ら流類ひの事は。怪誕とふて信ざ流ふ見高き事ふ思ふ。
幽ふ謂なる事なる彦し。抑この鬼門と称ふ方ふ怪しき
事れなるは。漢土ふ早く聞ゆる説
なるが皇国内ふても。ゆゑ其験あきふ非ず。それは上件れ曲
緒ふ因りて。其逐れたる邪鬼どもの悪き氣吹のさし來
る謂なりと所
思ふる形り。そは謂ふ流鬼門の方形る國れ端ふ。鹿嶋香
取の二宮なるふ。息洲社ふ加りて。此を世ふ東國の三社と
云ふ。然るふ此息洲社ふ祭る神ふ。鹿嶋社傳記ふ岐神なる
流れ。上れ由緒を思ふふ。小縁れ事あらぬ聞ゆるをも思ひ

合奏ぜし。息洲社に坐せる神を今も氣吹戸主神ぞ住吉三柱神ぞなど云ふ説どもの聞ゆるぞ事実に叶ちば信られぬ説なり。抑この社を鹿島社に擬社として祭祀も鹿島より勤め来たて社傳記に遥宮とも称たり式に載さるに遥宮とも後れて立給へりやも思られぞ甚く古くる社なる故に此を鹿島と思ひ誤たるも有りて夫木集長能の哥に神さぶるかしはを見きば玉ぶ足の古ゲ元むうたぞ世ゆ古ゆ経たり古と詠さる。此の浦なる瓶をよみ西行法師も此を鹿島や誤ゆ記其を拾集抄に引きて古史傳に論ふを見るべし長能朝臣の哥に小瓶とよ元るを諸国里人誇やうの物にも見えて即今も息洲社瓶と称ふ物なり此の奇しき物なる事を世人れ知まる事なるゲ。あほ同じ邊なる下櫻井村の川底に生ぜきさる竜も二ツなるをば人知らぞ共に自然に底石に生ぜきさる竜なり。いと稀く古そ。然れど鹿嶋香取の宮は更ぞ。息洲社にも常み拜み奉るぞし。然るは此三社は神ぞちの神世ふちる悪神妖鬼を外國に却ひ給へる事依て古そ皇御孫命は天降坐して。それ御治めの御惠みを蒙るなれ。況て武家なちむ人は一日片時も鹿嶋香取の大神は御稜威を仰ぎ奉るぞき謂を忘るはじ。此事いふも更なり。其は神世に無比の勤功あるし軍神に坐ぞ。鹿嶋宮に祈て。劔法馬術など習ひ受奉る。香取宮に禱めて。鎗術を習ひ奉れる人ぞの有しは。神世の由緒を思ふに最も尊き事なりかし。古くは鹿島は神官に国摩眞人と云ひし人。永禄の頃に塚原卜傳と云し人。大神に太刀の妙術を授かり。應永の頃に大坪道珪と云し人は馬術及び鞍鐙を作る法の御教をうけ。卜傳に以前は飯篠長威と云し人は香取宮に祈て一巻の書を授かり。鎗長刀は妙術を得たり。此術次々相承て卜傳に傳はり。共に天下に其名を耀かせり。今世にある劔術鎗術の諸流は大抵此人に傳たるなり。伊勢鞍由来記。武藝小傳。鹿島宮霊験記などを見て知べし。あほ

委しくは。古史傳に就て見るべし。

○次に出雲國は方位向ひ。右の如く拜み奉りて。八雲立出雲國八穂米杵築宮爾鎮座坐豆。幽冥事知看須大國主大神。后神須勢理毘賣命。二柱乃御前乎慎美敬比畏美畏美毛遥爾拜美奉留。

八雲立は。彌雲立と云ふ語にて。彌が上に雲の立騰る義なるべし。此を出雲國の發語に冠らせと。速須佐之男命は。八雲立出雲八重垣云々は御歌を始めとし。奉くは古史第七十一段の傳に註せるを見べし。八穂米も發語にて。此は八穂米を杵ゆて築くと掛けたる詞なり。八百丹きずくと云ふは。八穂米の轉訛なるらむも知ぬべからず。けて杵築宮といふは。

即謂ゆる大社なり。抑古の大社は鎮座なり。大國主神と申れは。速須佐之男大神。かはれ奇稲田比賣命に御合まして八嶋篠見命。まさの名を八束水臣津怒命を生しめ給ひ。此神の御子に。天菁根命なり。大國主神は。即古は菁根命は御子なり。御母を刺國若比賣命と申せり。大國主神に直に須佐之男神の御子と申し。或は六世孫なと云ふも皆謬なること。古史徵に論へるを見べし。抑須佐之男命かの石屋戸はれ事をみて後に。千座置戸の祓ひ事をよりて。御心清くなりて給ひて。高天原を降りはし。天は壁立つなり。外國を見巡りて。出雲國に還り著給ひ。かの手摩乳足摩乳に請ひは隨に。八俣は遠呂智を斬りて。所思えは天村雲は神劍

を得ましぬ。それ御子御孫あどの。國作を給ふを見立て。年久しく此國ゐ御坐せるゞ。かれ神劔をば御孫葺根命な天上ゐ遣して。天照大御神ゑ献を給ひ。御曾孫ゐ大國主神生坐て後ゑ。豫て所思せる如く。根國ゑ入坐せ。其も大国主神の御立ゑ遂ゐ功成給ふべき祝性ある事を。御覧じ定め給へる故あること。古史傳ゑ説くるゞ如し。斯て大國主神ゑ。庶兄弟八十神あをしゞ。共ゐ謀をて。大國主神を殺し奉らむと爲るを。須佐之男大神ゑ坐ゑ根國ゑ到り坐して。その御女須勢理毘賣命な御妻とて。大神ゑ稜威の御靈ゑ御璽くる。生太刀生弓矢まゝ天沼琴を賜てを還り坐て。彼庶兄弟ゑちを悉く追撥ひて。伊邪那岐大神まゝ其祖神ゑちの作竟給はざる國處をみゐ造を給ふ。此時ゐ少彦名神外國ゑを來坐て助け給ひ。此神まゝ外國へ往坐て後ゑ。大國主神御自ゑらゑ和魂大物主神の既く外國ゑ往坐ゑをしゞ還り坐て。共くゐ國造を堅め給へを。少毘古那神・大物主神のことを云べし。次詞の所かくて世の人種ゑ便とある事をし種ゝ始ゝを。かくて世の人種ゑ便とある事をし種ゝ始ゝを。大八嶋國の大國主とて。出雲國ゑ御座りるゐ。天照大御神。皇産靈大神ゑ御命もて。天穗日命まゝ武甕槌神。經津主神ゐど遣して。大八嶋國を治むる顯明事を皇美麻命ゐ讓を。幽冥事を治ちべき由な詔しめ。殊ゐ重く御ゐらひ有りしゝば。此御國な皇美麻命ゐ奉を。須勢理毘賣命

と共に杵築の大社を本宮と定めて、無窮に幽冥事をろしめす事とは成りぬ。是時よりぞ幽顕をじ免て別アりける。上件に説く事どもは、古史の第七十八段より、第百二十九段まで、の事実れ、大凡と云ふも足らぬ大器を約めて如此説出しあり。そは斯むうアり少あるとも、其大国主なりし故よし、まゝ幽冥を治し給ふ事の由緒を説おうでも、下に云ふ事どもは不審の起ること有れむあり。玉鉾百首に、「八雲立る出雲は神ないのふ思ふ大國主を人は知らじやも」。此は大平の解に、出雲は神は杵築大社にアり。大國主をとは唯に大國主命といふ御名を云へるはみふは非ず。是は葦原の中の國、天下を経營し領じ坐ませし國の主なる神なる物をと云ふ意あり。人は知らじやもは、人は知らぬうと云ふ意にて、世の人々かく尊く重き神にて坐まはを、其とも知らずに居る事うと、深く咎めたる詞なり。一首の意は、出雲大社の神をむ、世の人々は何に心得て居るぞ、此神は、天下を経営し給ひし領知し給ひし国のなるし、大国主神に坐ませとは知らぬ事を云へるまて、世人は出雲の大社を必尊敬し奉らでは叶はぬ神なる物をそを知ざるを、深く歎きて詠れし歌にと釋くるが如し。抑大神の尊きあとは、國土を經營まして、大國主と坐し故のみならば、世は顕明事として、國民を治め給ふ御政の現事故おそ、皇美麻命に譲アり白し給へれ。顕明事を故大人さら、日本紀の訓注ふ通りてアラハニゴトと訓れしも非カクリゴトなるあと、古史徴に既に云へり。幽冥事として、國の治亂吉凶及び人は生死禍福あと、凡て誰が爲に態とも知らぬ行は

除〳〵神事の原を裁判し給ふ大神は坐ぬ故ふ常は禮拜し奉らずは叶ぬ神あり。是をもて玉鉾百道なも目に見えぬ神のまゝろの幽事はかしこき物ぞ於れは思ひそ。と詠れまつり神は心の幽事とも大国主神の幽世に坐て治さよふ神事をいふ其は誰が為ぞ態と顯ふ知れぬ事ある故は目に見えぬと云ひ神代紀には幽事を書まさとり畏き物ぞとは恐るべき事ぞとあり於れは思ひそは麁畧は思ふかと言れしあり。然るは此現世は目ふ見ゆる事ども は。假令恐ろしきも。人ふ知らるゝ悪事をせ給ば世の咎を受るまと無れど。人の得知らぬ悪意悪事は。目ふ見えぬ神の憎みを受る事ゆゑ。靈は眞柱ふも記せる。一條兼良公は神代紀纂疏ふ。人為悪於顯明之地則帝皇誅之人為悪於幽冥之中則鬼神罰之為善獲福亦同之。とあるが如し。古の御語

に。千金翼方及び玄學の書等に載せる老子の語に。人生天地氣中動作喘息皆應於天地為善為悪天皆鑒之勿謂幽昧神見我形勿謂小語鬼聞我声人為易善人自報之人為妄善鬼神報之人為易悪人自治之人為妄悪鬼神治之故天不欺人示之以影地不欺人示之以響此皆自信ふ此語の如く易然之符也。と有るまいと能く似まつり。ふ知らゝ悪事は有ふを。顯明ふ上よりは罰し給ふを会ふ知らゝ悪事の有るは人ふそ知ら紛。神を欺くまと能はぬ。幽冥よりの神は見行して。冥罰を行ひ給ふ。其は血を吐き體の粉砕くる如き。現罰を蒙ぶる事は無くとも必それは應ぜる悪疾災難短命。子孫斷滅の類は御罰を受る事ふは或は外の事よりは及びて。久しく隱せる悪事の。一時は露られて。公誅を蒙ぶふ事も有べし。善事を修して幸福を賜ふも同じ趣ふて。神の現形して寶財を賜ふが如き。現

賞を蒙ぶる事は無くとも。必ずそれに應ずる無病幸福長壽。子孫繁榮などは御恵を受る事あり。まゝ或は外事より及れざる善事の一時は顯はれて。幽冥世と顯明世は差別は公賞を蒙ふる事も有るべし。じて久しく世は知ら眞柱に記せる如く。相混じて共に一間の如き界あれど。其闇き方よりは。明き方を能く見あれど。明き方よりは闇き方は見えざる如く。幽冥よりは顯明を見徹しあり。右に引くる勿謂闇昧神見我形勿謂小語鬼聞我音と云へ葛稚川の抱朴子よりも此事を論じて遲速皆受殃罰天網雖疎終不漏也。天高聽卑其後必受斯殃也云何當以此微然而腕聰聞乎人自不能聞見神明而神明之聞見已之甚易也此何異乎在幽恍之外不能察軒房之內而肆其倨慢謂人不見也亦如籟鍾根物銖然有色惡他人聞之因自掩其耳者之類也と云るを思い合すべし。其は万葉集に海原は邊にも沖にも神集へうちはき在に諸の大神さち云くと詠くるは。何處とくも神のまゝ所あり由は歌ふて。何所もみな幽冥は中なる故に。今かく言ふ鼻先に神の立て御さむも知ざる程の我くあきば。空恐ろしく悪事は行い難き事あらんや。是に就て思い出くる文化十年の四月頃なりしが。書時は築地といふ坊所用なりて行きくるに。或屋鋪の外辺に在る土藏の白く塗さ尾に垂きて逃退く。かくの如きこと三四度あり。其様を得ざさく思ひ立止りて見居さるに。既に壁に喰付べく吠立る。時に其二匹の犬ども尾を屈ひ挾みて嘯伏られし時の如く泣て逃るを。まゝ引返して右の如く吠るに。まくと察るに。何物かそれ壁は辺に立居るあると疑いあく二匹れ犬もそれを見咎めて吠るあるを。其物煩げめて。時時いと恐ろしき威勢を示せて打倒さはりて叱る故に。犬も逃退くを。まゝ引返して吠るにぞ有りる。其時に往來の人も。なまゝ立止めて見る。已も殊に目を見張りて。其物を

見むと欲るは悲きりあり此ぞうの顕明と幽冥の界ある故
に白壁より外に少のれ影ざかも見ゆる事あり是を人子
畜るれども幽に近き物形なる故に其を見給むるに形ある
至りても人却て犬にも甚く劣る事あり浚めて其物の
心には篤胤我を見認むと目を見張るなるあそ可笑
あど思いとりりむ斯て其物土蔵の屋根に傳ひ上れる趣
ゆて犬を屋根に向いて吠れるが外よりを見えば形なれ
と見えて門より内に吠入るき何に奇しき事あらずや
此を鼻しき魅物の類なるに論無れど幽冥の物形なる故に
顕明の人よりを見ゆる事形し是を以ても今かく云ふ臭
先に神れ立ゆさむも知ざれど悪事上に引るる老子の語
を行ひ難き事ありとは云ふあり
ふ人生天地氣中動作喘息皆應於天地云くと一のはを信に
金言なて應於天地とは天地の神明に應ずる義なり其は
かく生れ出し身體識神固より神れ産靈の賜物形なる天
地の造化に養はれて呼吸動作を爲ゆまば言行心意悉く
呼吸と共に天地れ神明に應ぜずと云こと無き道理なる
故に此皆自然之符也とは言ふ然れど葛稚川れ語に会
悪を行ふ人を紗恍の外に在る人れその房内を察こと能
たび其倨慢を肆にして人れ己を見ずと謂ふるに譬へさ
ば実然る語なぞ有り例
年の正月己二十歳にて父母に話こそ有れそは去ぬる寛政七
江戸に出るをり八町目といふ駅の某屋と云ふ宿に
るに吾れ一人旅にて甚く疲れて早く一間に臥るに
後れて若き旅人の三人連形るが宿りて己が臥る例次の
間にて酒肴を出させ酔さわりるが興に乗じて飯も女
を見そ來むとて懐中れ物あど取乱し置るる侭にて三人
とも出行りる迹に其宿の下女そを來りて己が寝る一
間にを破ぶ去ま引るるく闇き故に見えぬと思へる様に
てまた銚子に口を切りて酒をけみ肴をも食ひしを最
かしと見居るに懐中物に目をとめて其中なる金子を

取りて懐に入れむとせしに已思ひ々らく酒肴あど食戸るは免まれ難きを彼ら今は帰り來て金子を心ばせ等ぬ所時は我が疑ひを挂あむるは大事なり默せべき事ふ非ぎと心を定めて立行むとする時は女まてと色を挂れば腰のぬくるむりて驚きしめ已叱りて金子を元の如く收れおりを云ふは取らぎを云ふ去り言ひ爭ふ色を聞て主を始め家内の者も來れるは彼三人も帰り合さり者どもより責みて金子を出せと云ふは猶取られと云て出さ孫む皆くよりて赤裸とあしるは彼金子ばらりと落あり二百匹むりぞ有りる現所前りて痛く打擲られ直ふ逐出さる趣あり此を可笑うりし事と常は思ひ出らるを稚川翁の語は思ひ合されて今かく認り出さるおりて然れば漫ふ漢籍を嫌ふ倫も右等れ語ふは漢く心を潛ぎくあそ又かの陰隲録といふ物ふも頭を擡所ふと三尺ふして神明あり言るは誠ふ然る言りて善きふ於け悪きは於りて幽冥より見行ちは何は畏き事あらばや然

所とも知らぎ影くらき悪事を爲ぎは何ふ愚なる事形らぎや其は世ふある人を欺き得るとも永く幽冥より神の憎みを受て遂はその御罰を蒙らぎを云ふと無し是以て已於孫は志をして謂を立て此現世は存る人を譬へば我が善意故もて爲る事なも接外りて悪く思ひて憎み或は爲ざる事を爲さりと言ひ云ざる事なも云へりと爲て誉めも謗りも所る物あれば此は心とりるは足らば世間の人は毀誉は馬の耳は風ふく如く聞あして我が本分は誠を尽し幽冥れ神さちふ對して愧ること無きやうふ有らまほしとも言ふあり

凡そ人世れ實德を修せむを欲ぎるは幽冥ふ愧恐るを云ふ事を心得る時も浅めて悪化事の爲ぎを道理なれば其幽冥の原をたろし看れ大社れ神ふ誓ひて其實心を琢く時は大凡そ道ふ違ふ事なし殊は此現世ふ

居る間に長くとも百年を多くは越え給はで世位退きて
は永く大國主神の幽冥に歸して其御制を承給ふる事
なれば今より常に拜み奉るべきは勿論なれ事なれ
ども幽冥の事に神の道は講説の中にもやがて無き
事にて此道理をよく明らむるは人に実德に至るべき
根元なる故に靈柱を著せる始より此事を專とせば
て古史傳に殊に委しく書著せし其後に鬼神新論を再
訂し西蕃太古傳をも作れるが共に漢籍によりて其義を
明し後に印度藏志を作りて其国書の説に依りて其旨を
説き亦古今妖魅考など其餘にも書きと書くるに書ども
事の因に此旨を著述せば世に云ふこと無れば世に知ざる
事に多く有れども幽冥の道理なり知り難き事に有る
ことを無き故に此を考へ及ばむ限り知りて自らそ
の実德を修めて人にも及ぼし古に謂ゆる物識人の數に
も數へられて此道に功績を立むとの態なれど其思
ひ得たる事なし一書には記し散らして彼にも此にも說き
置ばなり右に云ふ書等をみな熟く見て其旨を得べし今さて
に說く所に初より其端緒を云ふのみそ
なれば次に詞を說く因にまも言ふなし

須佐理毘賣命は古事記豫美國段に須佐之男大神に御女とはみ有

て其御母は知られざれを委曲に攷ふるに此に高天原
に天照大御神と御誓ひの時に生坐せる三柱の女神を
須佐之男命に屬給ふる一柱と御體を合せ給ふ
國主神に彼國に往ませ時に夫婦を別て其御後より
種々を給へる事ども有りて夫神に從ひて此顯國に
還りまし其御嫡后と別て給ひ即言代主神に御母に坐ま
し其大國主神に彼此を妻問し給ふに御酒ちて詠給
ふ御歌に主あそは男にいませば打見る島に崎く若草

妻持せら矣。吾はもよ女ふし有れど。汝を妃て男はふし、夫はふしを和し給ひ。顯幽分れし時ふ。其夫神と共ふ杵築宮ふ静ア坐せり。是を以て神典ふ。大國主神を宇那賀祁理て。今ふ至ふ迄て鎮坐ルと見えるア。須世理毘賣命。やがて彼三女神の御身を合せて。一柱と坐せる神ありを云ふこと。人れ未考へ知ざアし説あり。委しくは古史第六十四段の傳を見て知るべし。宇那賀祁理を互ふ項ふ手弦懸相ふ如く。親く雙居さはふ義ふアと先師さちれ説あア。彼高皇産靈神ふ神魂御祖命副給ひて。其御後の事を知し省ふ準アて想へば。大國主神の幽事ふ。ふし省ルそれ御後の事きふし省し補助給ふこを申ルも更ふアア。是を以て是詞ふ此比賣神の御名を

毛顯はし白せる外ア。女を殊ア此神ふ誓ま外アて。家ふ在て能く父母ふ事ア。嫁ぎては汝を妃て男を外し。夫はふしを夫をはもアア。夫ふき後を子ふ從ふ。と西土人も云る如く生狡意成用ふることを無く。古歌ふ。後の世も是世も神ふ任せるや愚外る身れ信あるらむを詠みし心を種とふし。幼き程よりも。殊ふ嚴しく佛法三昧は禁制して。意ふ汚き隈成形ふ。身れも也祖の本ふる正し妃直き神の道ふ習へを教ア立るぞ。女子持さ流親れ慈愛と云ア。くれむ。然るは佛法の をしアふ。極重悪人。無他方便とて。一芦南無佛。皆已成佛道 云ひ勧むるを。愚ふる心ふ。実ふ汚る事と思ひ惑ひて。 ふど 齢を重ぬるを。愚ふ形アもて行形。然をがふ自ふ らも常ふ僻め流態ア。犯せる罪の積流とは。心ふ問れ

知れ〜も一色は南無佛一論の題目よそれ罪の消滅をべく賴み思ひて改めむかれ門柳の句ふ六阿弥陀経または慰婆〜よ〜池上の縁日かぬ我慢漏〜あど云へるも然る事ふて其方不れみ燃まま外見菩薩れ相をま絡び内心夜叉の角を曲ま歯ぐきを噛て嫉妬を罵ま市日ふよ死息の音をちて於と出し〜と云へ如ま老嫗の多きをよく見れむ親れ城し子の悪うまし童女が人の姫とあり然て姑と成れる也りま。

○次ふ大和國の方ふ向ふ右れ如く拜み奉まて。

大和國城上郡大神社爾鎮座坐須大物主神山邊郡大和社爾鎮座坐須大國魂神高市郡宇奈提社爾鎮座坐須言代主神三柱乃御前袁慎美敬比畏美畏美毛遥爾拜美奉留。

師れ國號考ふ大和と書ふ所れ必於ふやはをと讀ふをあ

まと和名鈔ふ畿内れ大和もはと其國の大和郷も共ふ於保夜万止と有をもて知ま〜し然るを常れ語ふ夜麻登とも夜麻登とのみ云ひ來れるあり扨て夜麻登と云は毛や畿内ふ所大和一國れ名ふ依ふ神武天皇此國ふ大宮を造り坐せるよまを志て後の御〜代〜れ京もみふ此國内ふまし故ふ於れ於ふ所天下れ大名ふも成れまと言れるが如し。ふ国号考ふ奉き考へあり就て見るべし大神社は神名式ふ城上郡ふ大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗とのまて此れ上れ大國主神の和魂れ神ふ坐し大和社は神名式ふ山邊郡ふ大和坐大國魂神社名神大月次相嘗新嘗ふ有まて此れ大國主神の荒魂れ神ふ坐ふまこ此二社とも相殿

此神さち坐ませど、其も古史傳に就て見べし。けちて荒魂とは、伊都速く荒ぶる御魂をいい、和魂とは平穏しく和しき御魂を云ふ。此も凡人ゆゑ云ふべども、量くふ從ひて、此二魂は有るを、其魂の強く凝り、其体も體よりも分アて、種々に靈異を顯はす事あり。土佐籍より

離魂病などと云ふも、実よりも其思ふ魂の凝りて分るるなり。即あら魂の所為なり。また世にも往々生靈とて、深き思ひより凝れる人に魂の別に現形して祟りを為ことの有るも、同じ道理なり。神世に大神たちは皆それ御魂に大に坐ます中にも、大國主神などは、其魂の殊に大きく、凡人に比べては、幾万倍の大形なと云ことを知るべし。是をもて殊に御魂を凝し給ふとも無くそに荒魂和魂の分かれて、別神の如く、本體に向ひ立て、互に物言ひ交し給ふ所事も有りし形なり。人の魂も次くに大きくに為れば、大きく形る物なる事は、霊に眞なるらに少く論へる如くなれど、其学びに古語に我が御世の事能くそ神習ふ青人草習はめやと有ふ事なれ、きて心術を修し立るにあり。此も世の常なる学者などの、得しも知ざる妙道なるが、中々に尽くるに尽くも有れ漏む漏し。けちて其和魂大物主神に顯はれ給ひし事は、大國主神少彦名神と共に御國を經營し給ひ、いまだ造竟給ざる所間に、少彦名神又しも外國へ往坐しぬれば、甚く御力を失ひ坐て歎き給ふ時に、海原を照して歸來ませるぞ始なる。然るに大國主神、そは御自の和魂なりとは知ざりて、問答し給ひてぞ其とは知給ひ所。然れど魂の大きなる人は、我知らぬ其和魂荒魂なども、其の躰を分りて、他国所なども、霊異を顯れ事の有まじきに非らぬ。そは生霊離魂などの事を思ひても知るべし。

けて此神は海より歸來ませるなり。何か爲給ふる事ぞと云ふ。大國主神を元より須佐之男大神は有ゆる外國々を も經營し給はで。得有まじ。汝御業をうけ繼ぎ坐せ。其大なる御魂を外國々はで行通ひ坐れば故に其和魂の分ひて外國に往到まして。其國々を造ひ固めて御坐せるぞ。少彦名神は。まゝ外國に渡ひ坐ける。其御本體は甚く御力を落し給ひる故に。彼少彦名神と引替ひて。和魂神の歸ひ來坐るゆゑ有りて名。神と共にいそしみ成給へること。各国の書策れ。そ伝傳は非ざれど。漢籍まゝ印度籍にて。慥に知らるゝ。准ひて。其餘の国々も。然有しなる推量られ。其を赤縣州にて。大国主神を。太昊伏羲氏とも。太眞東王父とも

稱し。少彦名神を。太一小子とも。東華小童君とも稱し。印度国にも其傳へあひ。此を古今の学者は。こゝ於て知らを云ざる說ある。己師の御蔭にて。始めて委く其說を考へ得て。赤縣州の事を。西蕃太古傳に記し。印度国の事を。印度藏志に記せるを。次條に其大意を說くをお於ゆ。大國主神は然なりひ。少彦名神は避け給ひし事を歎き給ひ。師說の如く。荒魂のみ進ませる故あひし。和魂の歸ひ添まして。二魂は具はひ給へる故に。國造ひ竟て。大造は功績をば成給ひ。是を以て神典に。大己貴神之荒魂與和魂戮力經營天下之地。建得大造之績とは云へるなり。かくて大國主神の本體は。天津神は詔命の如く。かは杵築大社に鎮座して。こゝに歸伏ませる事の由をば。和魂大物主神ぞ。天に參上りて白し給ひ。此時しも八百萬の國神を帥て昇ひ給ひ。まゝ

無窮ふ幽冥の事掌はして。有ゆる國神は酋と坐せば。大物主と申に御名は。古れ時ふ。皇産靈大神の賜へる名ぞらむと言れしは。實然る語あり。そは物とは廣く何ふも云ふ語なれど。古き祝詞は四方四隅余里荒備疎備來留物と云ひ物狂ひ物氣憑物物ふ態まゝ物識人あど云ふ物・みな神を指して物と云へるを有ゆる国神の酋と坐ゆ思ひ。はゞ此時そは荒魂大國魂神も共ゆ參合せて辨ふぞし。皇美麻命は。八十魂の神を悉治め給ちむ。吾は昇ゆ坐して。大地は官を悉治らむ。と期ゆ白し給へゆと有るは。上は師説ふ準ゆて按ふは。大國魂と申に御名も。此時ふ。皇産靈大神の賜へる名ある故し。八十魂の神を悉治め給ふとは。天皇命と坐して。天神地祇をみな祭ゆ治め給ふを云ひ。大地の官を悉治めむと宜へるゆ。は。大地は幽官をみな治らむと宜へるゆ。は。て大國主神は幽冥事を志ゆし看こと。區て申せる古傳はかくは如くふて。荒魂は大地官を掌ゆて。大國魂と坐し和魂を有ゆる地祇を掌ゆて。大物主と坐して。御國は幽冥はみふ非ず。有ゆる萬國の幽冥は悉志ろし看古ゆ。日月の大御神さち是御國ふ生坐して。其御光を万國ふ照し幸ゆ給ふ道理は同くぞ有ゆる。然るは漢土天竺ゆどの冥府は事実を諸書ふ記し傳へゆるを見ゆは。多く其国々の風俗も各く異は為るまゆるふ同くみふ見ゆ。然るべき所以なる冥府の政ある故く覚ゆれど。其由を知ゆ人の詳は知ゆ為ゆ。然れど万國ふ生とし活ゆ人物ゆもふ。此世を退ゆては。悉く幽冥ゆ歸ゆ故謂ふ。ゆ。は更ゆ。そは荒魂和魂をも合せて。禮辨し奉る故き事ふ

原を。世人それ道理をう於ても知らぬ。偶ふ神道を奉ぶと云ふ人あ原も。生くる間古そ神ふは仕へ奉れ。死ては佛道ふ頼らでは。得有らぬ如く心得さ矣るを。最も憐むぢき事ふあそ。己がかく世俗の愚癡を憐み歎く事情を知らむと思ふ人は。古史傳ふ幽冥の事を説くる所詞を熟く見て後ふ。印度藏志及び古今妖魅考。鬼神新論。西蕃太古傳などを見ふらむ。人は生れ來る由緒。すべて死くる後は大凡も知られて。死後の安心も自ずからふ定まりあむのし。但しそは書ふかき取れるこそ己ぶ態あれ。悉く古傳古書ふ本ずき。古今の事実を參考して記せる所ぶ。ぢて大物主神は。かれ海原を照して歸來ませる時ふ。大國主神の御身ずから。今の大三輪ぢ地ふ祠ひ給ふ。大國魂神は。神代よりふ。崇神天皇ぢ御世まで。禁中ふ祝ひ奉られしを。此御代

ぢ六年といふ年ふ。山邊郡ふ遷し奉ふ給ふり。此御社今も新泉村ぢ云ぬり立給へふ。大三輪神社ぢ。大うくふ御築えませど。大和神社は詣で見奉るふ。慨く御衰ふ坐して。古記錄ぢもふ見えくる。古への御築え此事を思ふ。おとく涙さし形くる。御有趣あり。其ぢ迫く文政六年の十月ふぞ有りる。古道ふ篤志あらむ人は。杵築大社を更ふふ。右ぢ二宮ふ必ず詣で奉るぢく。はくふ其宮人ふ御靈代を請て。齋ひ奉るぢき事ふこそ。己はし早く大社の御靈代ぢ物をこ。其後ふ三輪社。大和社へぢき。白くら詣で。其神主くちふ逢ひて。そぢ御靈代と齋くや。おと無き物ふ請得て。大社ぢそぢ本ずき御躰ふ坐せは。中座ふ安奉ふ。左右ふ三輪神。大和神ふ居奉ふて。一座と為し。下座ふは。我ぐ平氏の遠祖くちを始め。其餘も由緒あ祝ひて。祖先の祭屋とは為くり。但し此は人ふ語るべき事ふは非ぬど。己ぐふ氏寺の姫みふ受ざらむ人の。志ある輩ふも聞えまふしくてあむ。ぢて言代主神

は大國主神の珍子の第一にて。亦名を味鉏高彦根神とも賀夜奈流美神とも一言主神をも申せり。但し此説を未しき輩には心得がふく思ふも有べし。古史第百二十段の傳に就て見む。其疑ひ晴るむものぞ。此神を大物主神大國魂神と一柱に總て拜み奉る事は。彼經津主神武甕槌神の天津神の詔命を受て大國主神に此御國を皇美麻命に避奉らむや否と問ひの御使に降り來ませる時に大國主神答へて我が子言代主神に問ひて報命さむと白して言代主神の三津崎ちふ海に船をうかぶ柴漬を構へて漁獵し給ふる所へ御使を遣はし問給ふに言代主神その御使に神に畏し天津神の御命にまふく此國を天神に御子に奉り給へ吾も御詔に違ひ奉らじと白せ唯一言に言離ち給ひも果ぬそれ乘給ふる船枕ふみ傾りて青柴垣を漬へ水に退手を拍てそ入坐りぬ（青柴垣とは今も漁獵に用ふる柴漬にて海辺大河辺にある人のよく知れる事なり此をふしぶしとよむふしとを事なして拾遺集に平兼盛哥に逢ひし定のかうり云くと詠めり此退手を神典には逆手と書き逆字の義には非ず今これ現世を退めて幽冥に隱れ給ふ時に拍鳴し給ふる故に退手とは云ふなり即サカリテとよりて省る語なり延喜の鎮魂祭式に行酒三杯以後拍後手退出と有によて知べし此を伊勢貞丈主の説に從ひて云ふ記傳の説を信がさし）ちて其乘たる船を蹈のけ給へるを再用ふまじき意を示せ給ふにあらず。然るは大國主神固より此御國を天神の御

子ふ。避奉アに給ふ後き大義をば。曉アに御座せる物うら。御長子言代主神よ心を形ずして。猶ほれ神ふ問ひて報命さむと白して。御使ほ遣はせる趣ある依故て。我在アそは中〻ふ父大神の御心動きて。大義を過ち給ふ事もや有むを。己命れ顯世ふ心を殘さぬ由を露はし。右のごと一言よ言離ちて。先かく潔く隱アに坐る形アに。是ぞ言代主を名ふ負坐せる由縁ある。そは言代とは。言の信といふ語ふて。天神の命ふ違奉らじと。其船を蹈傾けて言よ信を立給アる故れ御名ふアに。岡部翁の祝詞考。神賀詞の処ふ。神乃祝部と。他の祝詞の詞よ。祝代を。ほと同じ言ふて。利れ留志の約れるまく。祝の志留志と云こを。あり。と言れる意ある依ら。其志留志は。信字れ義あるあと。信物音信ふを解ふまて知る依し。

そは神功皇后ふ。此神の憑まして名告ませ依時ふ。於天事代於虛事代云〻と宣アるは。天ふ虛て言れ信を立給へる由て。是時の謂をもて名告坐ること を著く。此御名を古書ともふ。言代とも。事代とも書されど。言も正字。事をみな借字形り。はや〻雄略天皇れ御世て御形を現して。天皇命と共ふ山狩し給へ依時ふ。吾者雖悪事而一言。雖善事而一言。言離之神葛城之一言主之大神也と詔ふるも。吾は悪事も一言よ言離ち。善事も一言よ言離ち。浅む依神ふて。葛城ふ居る一言主大神を云ふ神ぞを詔へるふて。是を此時の由よ因アて名告坐るあに。記傳よこの言離之神とある文を。コトサカノカミを訓れしは。此一言主神やがて言代主神ある事を考漏さ坐し故あり。葛城之と宣へるは。彼郡ふ。

葛城之鴨社として御社の有れむ有り。神名式に其郡に鴨都波八重事代主神社と載さまゝに。斯て此神まゝ高彦根神と同神なる由を土佐国風土記に見えて古史傳に委く説さるが如し。○因に云ふ上代の人々れ進退に手を拍て云ふも更なれば神世に他神さちに然る礼儀の見えなる事なれば更なり。此御狩し給へる時も天皇の捧げ給へる礼代の物なれば御手うちて受給ふ事の傳はれるも奇き事なこそ。此をぬと思ひ付まゝ故に云ふ若し拍手礼は此神より起れる儀あらむも亦知ぬべうらば。ちて大國主神より。御使に遣はさゝ神歸りて。言代主神の御答まる其有やうを申さらば。大國主神。さゝに其御心を決め給ひて。武甕槌神。經津主神に。吾子等百八十神者。八重事代主神。爲神之御尾前而仕奉則不違神此葦原中國者。隨命既獻焉と白して。事代主神と申す名の御魂を。宇奈提社に坐せ。高彦根神と申す名の御魂を葛城社に坐させ賀夜奈流美神と申す名の御魂をば。飛鳥社に坐せて。皇美麻命を近き守神を獻て置して。遂に現世を避奉て給へるさと。上件に説さるが如し。但し此に云ふ説ども。出雲国造神寿詞に言ふ説あるに。師も賀夜奈流美命と申すも言代主神亦名なる事に心著れざりし故に記傳及び神寿後釈に説れし説ども皆委らば古史傳に就て見べし。神之御尾前とは。師説に天神御子に歸順奉仕る諸神をひろく指て云ふ。尾前を前後と云ふが如く俗に跡前と云ふに同じ。後世の軍陣などに先鋒殿後をば重き任にする如く。此言代主神渠帥にして諸神の前に立ち後に立て。天神御子を守護奉仕らむと。天武天皇紀に。此

神高市縣主許梅か著アて。吾者立皇御孫命之前後以。送奉
于不破而還焉。今且立官軍中守護之。と詔アる事をも思合
せぢし。此神後世まで。神祇官ハ八神の列かも入りて祭られ
給ふも。全天皇の大身を守護奉アて給ふ由縁あり。と言れさ
ぬが如し。形を予が古史傳ヨ就て。其旨を思ひ辨ふぢし。ちて言代主神を祭る
る社の多う当る中か。高市郡ある宇奈提社を。殊か表して拜
せ給ふ如何と云ふて。此社を上か云ふ。ぢ。大國主神の定
免給アる三社ハ中ヨも。言代主と申ハ名の御靈を齋へる
社ある故形アて。然るか神名式ヲ。此御社を賀夜奈流美命神
社と出され。飛鳥坐神社四座と有る社の主
神を事代主神ありと云へる説ヨ依りて。師ハ神寿詞ヨ賀夜
奈流美命を飛鳥か事代主命を宇奈提か。と有るを誤りと

為られさ是ど。飛鳥社を事代主神と云ひ傳ふるハ。賀夜奈
流美命を同神ある故ヨかくは傳アて。神名式ヨ宇奈提社を。
賀夜奈流美命と出せる。是まで同神の別名あれば。実ヲは
害あけれど。神寿詞ヨ違へる事か。心著さざる誤
りの説ある。其は万葉集か。想はぬを想ふと云はゞ。眞鳥住む
卯名手ゝ杜の神し知さむ。と詠る歌も。宇奈提社を言代主
を申ハ名ハ御魂を志て。能く符アを思ふぢし。宇奈提社か坐れ神
を言代主神ありと為てハ此哥
もさらヨ由縁形き哥ある。ちて歌の意ハ心ヲ濃く
想ハぬ人を。口かハみ想ふ由ハ云。年ふハ。宇奈提社ヨ坐ち
言代主神志ろし看て。御罰あらむ物ぞと云ふて此を言
ハ信を立ある神ある故ヨ。言か偽ある紀由を。古ハ神か誓
ひ申せ例。古ハ例ぞ有りむ。万葉ヨも事実を詠謬れる哥
の無きヲハ非ざれども。此哥

た。神寿詞は宇奈提社に言代主と申す御名の由縁よりも能く符いて。最も感さく故実を詠み得。俗は凡人らは除て論ぜぬ。世に道くし紀事どさる哥なり。

も教ふる輩。まゝ我が古學は輩にも。誓へる言に信なく。昨日や今日は言はしも。飛鳥河の瀬とかはや。或は加の漢土ゆて。跖と聞えし盗人は。孔子を呵めて。好面響人者。亦好背而毀之。と云る如き人多く。或は裡に汚き心を持て。表をは清げに作めて。想はぬを想ふと云る歌文の。嘘言しを人にも教へて。神を欺き人を欺き人を欺き。自は欺きて人は子を賊ひ。まゝ或は竊に他の善言良考を盗みて。我が物顔に化免擬て。却て他を妬み譖る姦人の。撃も殺さゝ欲く所思由有て時〻は。人多き人は中にも人の為に世に生れ来し我や何ぞも。此をしも人にや有ゝと熟く視れば。あら毛物ぞ人は皮著る。」あと歌ひも出る。虎皮羊質の入魂にまじれ人多く。今の大業無らゝしうば。山にや入らむ海にや浮ばむと憤ろし紀事は常あるに。彼業平朝臣は惟喬皇子に深く交はて。殊に思ひは旨ありて。伊勢物語をう紀著れし。思ふこを云でや徒に止ぬ。ぼき吾と等し紀人し無き事ば」を詠れしは實然る事と。身を抓みて。ゆ思ひ跋ら原はさ是に就て。按ふに。葛稚川翁の子書に云れし事あり。内篇に曰く。小聞えて。其を交際。卷に。吾聞。大丈夫之自得而外物者。其於庸人也。蓋逼迫不獲已。而與之形接。雖以千計猶無虱之積乎衣。而贅疣之攢乎躰也。失之雖以万數猶飛塵之

嵩岱鄙林之陳朽條耳豈以有之為益無之覚損乎且人朋友也者必取乎直諒多聞拾遺斥謬生無清言死無託辞終始一契寒暑不渝者而此人良未易得而或默語殊塗或憎愛異心或盛合衰離或見利忘信其處今也譬猶禽魚之結侶水炭之同器欲其久合安可得乎と云ひまゝ世俗之人交不論志逐名趨勢熱来冷去見過不改覩迷不救有利則獨專而不相分有害則苟免而不相恤或事便則先取而不讓値機會則賣彼以安此凡如是則有不如無也天下不為益不中交也率於為盗者寡而生累者衆知人之明上聖之所難而欲力慮近才短於鑒物者務廣其交又欲使悉得可與經夷險而不易情歴危苦而相負荷者吾未見其可多得也雖投琬琰於培壤之上索鸞鳳于鵠鶴之巣未為難也吾亦豈敢謂藍田之陽丹穴之中為無此物哉亦直言其稀已矣夫操尚不同猶金沈羽浮也志好之乖次猶火升而水降也苟不可同雖造化之工大塊之匠不可使同也何可強乎とも吾聞詳交者不失人而汎結者多後悔故曩哲先擇而後交不先交後擇也あゞも訓誡の語等然るに業平朝臣と等しき人のおきよりの其氣を吐れし歌や合せて和漢古今あるじ浮世れ趣ある事も知られけるに歌や合せて和漢古今あるじ浮世れ趣ある事も知られあるに哀れ吾が黨は小子。かの万葉は歌の意を常に忘れず宇

奈提社に御坐ます言代主大神に深く誓を奉りて右の云ふ倫ひの汚きわざを習ふ事あく其行ひを先にあし唯とも否とも只一言に云ひ放ち捨べき。大倭心は振り起し其言の信なり。天にも虚にも聴こえ知し給奉らむと努ゆき捨て彼さひ捨るや戒人あれど子路ちふ男は諾を改む人を楽みとれし季布ちふ人は一諾と稱せられ過りて改めざるを謂ふ人なり上に罪を重ねる謂ふを吾門にもをり然るを人なれは非ら災然るは古哥に捨き名ぞと人ふけ云ひて在べし心の問をぐいのぐ答ふむと詠給るを然ふ事あく自ら問て答ふ人こそ能ちざる心をやうて神の賜物にあり共に天地の神に心を達しを知ら共に謂ゆる呼吸動作と共に恐ふ時は其過ち漸く小に失せ行れ本ふ理なし恒に思ひ行ひて知れる事あり自ら身は試くはせ已みを捨て知ひまさ他をも擇ぶ法を雅川翁に行品巻を常に見て他をも我にも比ふて鑒と為ふに及ことに無し故此巻を門人

等の為に已別に訂正
比校を加へし本なり。

○次に常陸國の方に向ひ。右の如く拜み奉りて。

常陸國鹿嶋郡大洗磯前社。那賀郡酒列磯前社。爾歸里鎮
座豆。外國〳〵能事掌給比。禁厭乃術止。醫藥能方止乎傳給
比斯。大名持神。少彦名神。二柱能御前乎慎美敬比。畏美畏
美毛遥爾拜美奉留。

此二社は。〳〵に齋はれ給ふ所由緒は。文德天皇の御世の。
齊衡三年十二月に。常陸國より上言に依りて。其は鹿嶋
郡に海を煑て鹽を製る者有りるに。一日の夜半頃に海を
望めば光耀ありて天に屬せり。明日に磯前を見れば兩の

怪石有りて。水次に見在せるが。其高さ尺許にして。神體の如
き神造の石にて。人間の石に非ず。鹽燒く翁そを見て異み
怖れ去りぬ。後に夜〳〵二十餘の小石ありて向に依來し
神石は左右に在て侍坐せる如く。彩色常に非ず。或は沙門
の形して耳目あるも交れり。（前に海原を耀して寄來る兩の怪石は。大奈母知・少比古
奈命の神躰。後に集へる二十餘の小石は。二柱神に從ひ奉る。末〳〵は神さちの像石と聞ゆるが。中に沙門の形して。
耳目は容ざに無き。時に神憑せる人ありて。其託に我を大
名持。少彦名命形ぞ。昔古は國を造ぞ。許て東海に去往さ
しが。今は〳〵民を濟むを思ひて更に歸來れぞと告給ふる
由を奏せる。是始めあり。法苑珠林と云ふ佛書に。晉の建興
元年に。吳郡の松江なりし漁人が。

遥り海中を見るに二人あり。潮に隨ひて浦に入り。漸く近ぢかるを見れば石像なり。像は背に銘あり。一に維衛と云へり。一に迦葉と云へり。皆相類する事なり。斯て同じ御世の天安元年八月に。官社と爲され。十月に。兩神を。藥師菩薩名神と號け給ふ所由御紀に見えて。神名式に。兩社とも。藥師菩薩神社。名神大。と載されあり。藥師とは。久須理志とも。久須志とも訓べし。土師あどの類ひ。古書に訓例おおく。藥爲の義あり。久須理志とは云ふに就て。藥師と書くこと。推古天皇姓を藥師と号くるかて知べし。谷川士清は。因藥師名。以称菩薩。從俗称也。今諸国二神之所鎮座。至莫不安藥師佛。吁不甚哉と云ひ。水戸殿の常陸志にも。二神者本朝始教医術神。故浮屠氏以其名近似附托。欺愚民。延及朝廷者矣。と有るは。共に然ふ言あり。大名持命とは。即上に條くに説くる大國主神に亦名ありて。下に云ふが如し。斯て此二柱神のかく俱に依來ませ。依て。渡き契ある事ありて。そは大國主神。かれ豫美都國より還り坐して。庶兄弟に八十神を悉く追避けて。既に國造らむと爲て。出雲國なる伊佐くに小汀といふ汀に到りて。御食きたし着むと。時に海上に人聲あり。驚きて見給ふに。物も見えず。頃時して甚小さき神ありて。天之羅摩に船に乘て。雀の羽を衣服にして。海水に浪に隨ひて浮び到れり。天之羅摩とは。今世にカバイモ。はまゴガイ。波ノフトコロ形など云ふ蔓草なるが。其実を二形にさけて。船の形しなる物に。其実の中に綿あり。是謂ゆるバンヤなり。大國主神。それ神を掌中に置て見給ひしかば。跳めて御頬に齧著くと。怪物と思はして。其名を問給ふに答へず。御從なる神あるも。

皆知らぬを白ぬ時ハ谷具久、くみて。此は久延毘古ぞ必
知り給ふ歟と白せば其ハ問給ふ。此ハ皇産霊神の御子ハ。
少彦名神ぞ申ス神形ハとぞ白しける谷具久とは蠟を云
ふ久延毘古ぞハ謂る案山子の事なり。大国主神の故事ハ是より前ハ兎の
言語へるハと鼠れ物言へる事あり抑かる物ども
れ物言アリぞ有る事をし誰も甚く心得がされ事ハ思ふ
事なるが此ハ幽顕の道理をざ能く暁ア得れむ更ハ疑
ひ形き事なり。そハは玉れ真柱ハ記せ如く鳥獣万物ハ元
より幽ハ属き神ハ属く者なる故ハ顕幽いまだ別ざり
し大国主神れ世までハ悉く神ハ物白しを天皇祖神さ
ちの詔命ハよりて皇美麻命は顕明事ハちろし看し大国
主神ハ幽冥事をちろし看ハ事と分ア定よりて後物等ハ
形ハそ顕ハも見ゆれ実ハ幽ハ属る故ハ顕世の人とは
言語ハぞ成し故ハ神世ハさる物どもの神等ハ物白せる
故事を疑ふ事とは成ぬるあり然れぞ今世ハも時とちて
ハ人の夢ハ入りて言語ふ事ハアリ其ハ夢ハ人神の幽ハ
通ぞること有れむあり此ハ素大津父ハ助けとし狼れ

欽明天皇の御夢ハ誨し白ちて大津父ハ官位を賜はしめ
ある類ハ思ふぞし。ある夢ハ幽冥の誨しを物ちり聞こと。
古今ハ其さめし少ならぬ物ハ人れ形と変ては人
の言語を形ぞハと今世ハも狐狸形ど人形を化りてハ能
く物言ふこを多ちるをも思ふぞし。但し久延毘古の言語
ひし事ハ殊ハ数ある所以ある事あり。第二十四詞ハ就て
見る。爰ハ使を天上ハ遣して。皇産霊神ハ白し上れば。詔給
ハく。此は実ハ我ハ子ぞ。吾ハ生る子。あよそ千五百柱ハ
係ハ中ハ最悪くて教養ハ順ハ。吾ハ手俣よりハ漏落ハ
し子形ア。汝大名牟遅命を兄弟と形アて。其國を作堅めて
ハを詔ひ遣せ給ふア。是を以て少彦名神ハ。手間天神
せア。其ハ然ばうア御形の少さく御坐せむあり手間天神
と申ぞハ産霊大神れ御手れ俣よア漏落給へる神ハれむ
あり。然れど産霊神の長子ハ坐ぬと古傳ハ有ぞハ依りて
必ハは宇麻志摩遅神ある事を考へ得て古史傳ハ委

く説あり。ちて産霊大神れ詔命ふよりて此二ばしら兄弟を為て給ふ所事は謂ゆる義兄弟の始ぞや云べき然れむ同心一致の友どち兄弟の義を結ぶと云ふ事なざるる。其ふて二柱神相古とは神れゆるし給ふ事なざるる。

並むして力放戮せ國巡て作堅め給ふる。大名牟遅神ゆし

死氣ふ中て病伏し給ひし時も有るふ少彦名神を城活さむと欲して温泉を用ひ始る。はゝ二柱の神相議ゆて。療病方ぞ禁厭法と放定め。まゝ酒をも醸ゆ給へて。是を以て百姓ども今ふ皆それ恩頼を蒙ふるとゆて。此二神かく国民の事を いそしみ給へる故を万葉の古哥を事物の始めを此神さ ちを係て大名牟遅少彦名れ神世より云く大あむぢ少彦 名れ神とそは名け初ゆめ云く大汝少御神の作らせる妹 背の山れ云くあど詠ふり此を天下れ人民これ二神の御 恩頼を蒙りて摩く思ひ奉れる故 を意ばゆを詠傳へるゆて。 ゆゝふ大國主神ゆ依時

ふふ少彦名神を吾らが造れる國豈善成せて云むやと宣ふて少彦名神答へて或は成せ依處ゆゆ或は成ざる處も ゆて宜ふ依。大国主神の御語れ意を我らが造れる此 ふしと其成りぬるを待ゆ孤給ふ御言ふるを少彦名神の 御答れ意を然は宜へど此八島国を或は成せ依処と或を 成ざる処も有りと宣ひて外国は都ふ成ざる処ふ多 ふり宜ふ意を含めふり其をかく宜へる後ふ常世国ふ 渡て給へ依ゆて知られゆて神代紀ふ此談也蓋 有幽深之致焉と有るは実然る言ふぞ有ふ。 ちて後ふ 少彦名神は伯耆国ふ到坐して粟嶋れ地ふ粟を蒔給ふる ゆ能く実れる時それ莖ふ載て彈られて常世国ふ渡 て坐ふり此二神の國造て給ふ時ふ石見国志都れ石屋ふ 御座せ依事も有しとぞ。木国名草れ浦ゆる粟島を後ふ此 伯耆国の粟島れ名を移せめと聞

えさせ給ひ。偖此神前ふも。蘿摩の船にて渡り來給へるふ。今し
も粟の莖ふ彈かれて渡り給ふるは。是ぞ玄家ょ謂ゆる乘
蹻れ術ょて。大虛空を蹈て渡り給へるうぞ有りける。ちて少彦名神の渡り坐ふ常世
國ぞ云ふは。何方ふまれ。此皇國ょ遥ふ隔り離れて容易ょ
往還ぶ〻ふ。紀處を云ふ名あるう。其本は神れ住坐ふ幽境を
常住不變の義ふいぬるより起りて。現在せる外國〻をも此
ょりと見ざふ所ょば。泛く稱ふ言とも成りぬ。然れば今い
ふ常世國は。何所と云ふ。ぞを知ぬふ非ざれども。已考へ得
る所說ふ。下ふ云ふ如し。常世国の名義。おのおの委くは古史傳ょ說くを見べし。師の常世底
と通へば。底依国と云ふ訛なりと云れし說も。然る事あ。ら猶深き由ょしふ。ちて少彦名神お
おし看ふ御心ふて常世國ふ往坐しうは。大國主神愁ひ
坐て吾獨して何うも此國ょ得作らむぞ詔給ふ時ょ其和
魂大物主神ふも外國ょり海原ふ照して歸り來ましぬ共に
ふ天下を經營し給ひ。然して後ょ大國主神遂ふ此御國を
皇美麻命ふ委ねて幽冥事ふ治し看ふと杵築大社
ょ永く隱坐せるふぞ上れ二條ふ說さるふ如し。然ふ文
德天皇れ御世ふ少彦名神と二神ふて常陸國ふ歸り給ひ
昔造此國訖去往東海今爲濟民亦更來歸と詔ひれ大名
持神も渡り給ひてぞ有りける。神世の傳へを記留せる事のい
辨へ〻る如く。彼るう。其古記ぞもを。古事記ょ撰錄しく。
進れる。和銅五年ょり。此神〻ちれ歸來ませふ。齊衡三年ょ
で。百四十五年ふり。少彦名神の。常世国ふ渡坐る古傳を記
し留むふ時ょ。後世ふかい〻る事ふ有りとも誰〻ふ知らむ。此

一事を以ても神世の傳ヲれ正実なる事も辨へ難し。但しこは生漢意より率られしなる人等の神世の傳を疑ふ論ヲ云ふ言ぞ。ちて少彦名神も前ゝ渡ヲはし大名持神も幽世ゝ隱ヲ坐て後ゝかれ神の御迹を追て渡り坐るゝて此時の御託ヲ東海ゝ去往なりと詔へ給ゝ依れば二神ともゝ其始免はまだ東海なる國ゝ渡ヲ其ゝヲ相竝ひて神世の當時ゝなり久遠ゝなりぬ外國ゝを作り堅めて此時歸ヲ來ませ給也ゝヲ故是をもて赤縣州を始免外国ともゝ此神等ヲ傳は方の如くぞ存ヲる其ゝ下ゝ云を見べし。然るゝ神典ヲ少彦名神ゝ渡り坐給傳ヲゝみ有ヲて大名持神の渡ヲ坐る傳なゝは何と云ふゝ少彦名神の渡り給ヲ所ゝ幽顯いまゝ分れざる以前の事なる故ヲ其傳へ顯

世ゝも傳はヲゝれぞ大名持神ゝ渡ヲ給へ給ゝ幽顯ゝの
ヲて幽世ゝ往坐ゝる故ヲ齊衡三年の御託なくては顯
世ゝ人の爭でゝ知らむ此ゝ幽顯ゝ差別を知べき予ゝ一大事の説なり勤ゝ麁畧ゝ聞ことを無く深く察ひ熟思ふぼし。ちて少彦名神ゝはじ免伊佐ゝ小汀ゝ依來はせる事は師説の如く産靈大神の御手俣ゝり漏落まして外國へ放れ給ひしゝ依來はせるゝて粟莖ゝ彈ゝれて常世國ゝ渡ヲ給ふと有るはまゝ外國ヲ往坐るなゝ此神と入替れる如くかの和魂大物主神ゝり來坐るは是はゝ早く外國ヲ渡ヲて坐しゝ還ヲ來坐るゝて此ゝ共ゝ外國ゝを開闢經營せむとゝ事なるゝ師の毛鉾百首ゝ引ゝるゝ常世のか

らの八十国を少毘古那ぞ造らせりと詠れ記傳おも其説を記されど此神のみは非ぞ実ふは伊邪那岐伊邪那美神まさ須佐之男神及び大国主神も渡り坐して開闢し給ひてぞ有りける委くは西蕃太古傳を見て知るべし

皇美麻命は國避はして後ふ往坐るはそれ和魂あらで大社ふ鎮座せる全體は御魂ぞ往坐るなり其を常陸國ふ歸來坐せる時の御託ふ大奈母知神と詔ふるは御本體の御名なるを以て是を知れり或人の説なきて然らば神世での間を大名牟遅神は天皇崇神天皇垂仁天皇などの御世じき道理なるは孝昭天皇焉き霊異の御託あるは如ふ其全躰の御名ふて炳焉き霊異を現はれ幾許ふも分何と云へるふ答りらく此も師説は神れ御霊れ幾許ふも分ふて同じ様は霊異を現はれ事を一箇の大きなる火を幾隈ふもお形じ様は移し燈きて本の火を滅る事なく移し分さる火も同じやうふ然るふ譬られば如くなれば此国は其本躰を坐せど其分魂の外国は渡りて経営ふ為

給ひも何ら疑はむ玄学の方術は玄一の術と云ひて飛人と云ふども数多は分躰して数所ふて事を為れ由ふ並ば況て此大神さちれ分身をし何ら疑はむ然れば斉衡三年ふ帰り来坐ふとは云へど為れ其分魂の坐ざる国は無しと知べし斯て漢土天竺を始め其餘の國くれ事を記せる書等ふそれ事蹟を知ふき傳へあふやと稽ふふは間近き故ふや漢土は殊ふそれ事蹟正しく傳へふ彼太昊氏とも伏羲氏とも太真東王父とも扶桑太帝とも云へるは大國主神ふ坐しそれ太昊氏ふ三文れ本義を傳ふ神農氏ふ醫藥の大法を教ふ黄帝老子は養神金丹の眞術を授けし泰乙ふ子泰乙元君なと稱せる神眞は少彦名命ふぞ有りなり其泰乙ふ子を東海王清華ふ童君とも東華大神青童君とも云ひて其形嬰孩の如き神なる故ふ神界ふ

て志ゝ名くる由見え扶桑国の方諸といふ山ゝ住む由なアは是少彦名神あらで誰神ゝ有らむまゝ扶桑国とは皇国れ事あること扶桑国考ゝ記せる如くあるを其扶桑国ゝ坐て幽界れ太帝ゝゝる神ゝ大国主神をおさて誰神ゝ有らむ猶訝しき説どゝも多ゝれど西蕃太古傳ゝ云アれむ此ゝ云はぢ。はゝゝ天竺の籍ゝは大國主神れ渡アゝ坐る事蹟は見え彩ゝ其幽冥を知るアゆ事れ訛傳はいゝ多く少彦名神ゝ彼國をも開闢し給へアと聞えゝ其事蹟いと詳ゝ傳はアゝ梵天子と稱し童子天竺も申して既ゝ首巻ゝ云へる如く謂ゆゝ梵志の遠祖ゝそのゝ梵天子れ口ゝゆアゝ生出るゆゝ由ゝて其傳ふる學れ高尚ゝしてゝ玄學の旨ゝ叶アゝこと彼玄弊比丘ゝ西域記ゝ梵志れ學風を載して博く精微ゝ究て玄奥を貫窮し人ゝ大義を示して導くゝ微言を以てし古ゝ博く奥ゝ居て物外ゝ沉浮し事表ゝ逍遥して寵辱ゝ驚らず知道を貴びて匱賤ゝ恥ぢ性ゝ有るゝ少彦名神の神業ゝ符アゝゝ思ふぢし此等の事どゝも印度藏志国俗品ゝ委く記せれむ此ゝ少ゝそれ端倪を云ふあり彼書ゝ就て見るべし。ちて漢土天竺をもゝ我ゝ皇神ゝゆれ開闢し給アゝゝ國あるゝ故ゝ漢土の玄學天竺れ梵學ともゝ其根元をみ彩其神等ゝゆアゝ出るゆアゝ是を以て玄學は更ゆアゝ梵學ゝも我ゝ古説ゝ傳ゝ漏せゝゝ正義れ採用ゆぢき事はゝ無ゝし毛非ぢ。然るゝ玄道ゝは彼周と云ひし世より投意ぶる一見を捏出して儒道と号くる道を建立せる尼ゝゆアゝ梵道ゝは彼牛裏氏起りて其古説ゝ盗襲して佛道と号くゝゝ道ゝ偽作せる尼ゝゆアゝ是を以て兩国ともゝ既ゝ其古説れ比ひむと欲ゝゝ至れ

アリ。其れ西蕃太古傳・印度藏志の二書より論るを見て知べし。右二國の古道は我が神眞ノ出るる由來を知得むるは其ノ準へて其餘の國〻も閲闢は更なり。其道は根元も我が皇神〻ちは傳說より出るノ。狡意を交アし物ノて謂ゆる蘭學の書より見ゆる藥劑は製煉及び伎巧の精奇なるも其恩賴ノ洩るる事なき由緣をも辨ふ能はし。そは凡て彼蕃人らの工夫し始めるる事とのみ思居れど実ノは西洋なる諸藝術のもやそは印度より傳へ〻る事なるよ。彼国人ら次〻に夫を加へて今云ふ如く精〻なるは至れるなり。蘭學抑少彦名神は古とは玄者ら豈その起原を知らむやも。

學は古書どもノ。泰乙小子は大同は制を執りて泰鴻の氣成調アリ。神明の位を正は者ノアるとも或は眞青小童君は孩は形貌なるアと故アリ小童と號は其器なるやや。環朗洞照ノし て聖周萬變ノるが。玄鏡幽鑒ノして。そは〻眞僞なるノ扶廣ノ館し。玄圃より遊びて仙職を治むるど有るノて其神業の万國より普弥なる事を知る能はし。（玄圃とは謂ゆる崑崙山なり。扶廣はま〻方諸とも云いて。）扶桑国内ノなる山の名なるが。何れの山を云ふ詳ノらは。然るノ上より說〻る神典ノ皇産靈神は御言ノ。此神の事を最悪くて教養ノ順は我ら手俣なるノ漏落し子なりと詔アるが不審なくて深く考ふるノ。まノ此神は天皇祖産靈神は長子なるて天は萠騰るノ著て生坐せる神ノ坐せば必天上ノ坐して其御國を造らでは叶は此神なるよ。皇祖神の御手俣なるノ漏ノ外

國ゝ放れ往坐せるゞぱ。於皇祖神の御心に違ひ。去の神や彦舅神なる故に産霊神の長子と傳ふ。り於葦を捕り〳〵国造に給いしも其本縁よりなる事なゞ。古史傳に委く說さる
に就て見む。疑い有まじく所思也。この於漢土ゝ傳へ坐せ係神仙玄道なる。養
神金丹なゞれ方術醫藥は更なり。其餘れ國〻ゝも。此神の
傳ふ坐なりと覺也る。いと微妙なる事どもの。書に記し傳
はさる中ゝ。此は卑しき末國の人間ゝ傳ふ居き事ゝ非ず。
固より遂に神位ゝ至るぢき道骨れ人に。それ啓發せべ
期を量りて。傳ふべき法なりと所思也係ゞ多かり。其は固
なり人を擇びて傳ふ給ひしゝゞ。其方術於いゝ人間に漏
傳はさ係も多ゝる故に。天道を泄し。この於世の狗行尸れ

徒なゞ何くさと誹議し於く。天寶を汚ゝ至るゞ。自於ゝ
ら天藻を慢ゝ係ゝ當る事なし。最悪く所思せ係故の御言
ゝ聞えなり。我ゞ神典れ更なり。漢土に傳へる神仙れ籍に
を此御言まく。小縁於ら聞なる事れ無き故以てか
ば右の二條より外ゝ此御言に當れる事れ最悪と詔ふべき事実の見えざる
くれ論ふなり。巳の眞柱を記さ係なゞは未これ旨を知ざ
りし故に其論をさな解し。天道を泄し天藻を慢ゝる
事は天皇祖神れ甚く禁誡し給ふこゝ彼内經故始め諸書
ゝいと多く見也。其は神典ゝ傳へ坐せ係と明ゝ知らる。然
天津神より出て諸神に傳へ坐せ係と明ゝ知らる。然
るれ二柱神の御柱回りの左右を巡へし事を占に給へ
術は更なり。大国主神を二度まで生しめ給ひ。よさ梯ゝ
饒速日命に卜種れ神宝に賜ひて。一二三四云くの神呪を
唱ふ係鎮魂祭ゝ御法まく。天忍雲根命ゝ傳へ給ひし術水
の事まく。神武天皇ゝ御傳へ坐し。呪術なゞれ事を思ひ合
せて。方術醫藥の道とも。天皇
祖神に出ゝる事を辨ふ。ぢて西蕃太古傳及び扶桑

國考に記せる如く。大國主神。少彦名神とも。此扶桑域内に幽宮を構へて。本居と爲給へゞ。漢土を始め。四方の國〻にも。遥宮を構へ。幽府を設けて。其國〻に神眞を主宰し。其幽冥界をも掌給ふなゝ。彼太古傳に載せる。峨眉山に仙宮を治む。天眞皇人といふ神眞を。扶桑太帝の所使ありと有て知る。古に疑あく大国主神の御子。百八十柱神ある中に。十五神をえらびて。天れ下の四方れ国国に遣はしたりと。神典に見ゆ。はゝ晉世に。かの魏華存と云る中れ一柱あるべし。

扨ゞ許へ。東華小童君を共に降して。道法を授與せる。暘谷神仙王を聞えし神眞は。扶桑太帝に倍從第一にて。其命を承て降れる由云。此を。言代主神にやと思はる。其[illegible]桑暘谷は同じ域にて。即皇國を云ばなり。猶思ひ合せて考證せる事ども多うるを。西蕃太古傳。志都能石屋。扶桑国考あゞに委しく記せり。就て見べし。

ちて總て正し。紀道書ぞもに。彼國人を更あり。何國の人にはあらぬ。道德を修し得て。神仙れ位に至るには。扶桑れ靈域に到りて。太帝東王父に拜謁して其印可を受け。生籙と云ふに其名を載されて後に。その位に昇り上天して。天皇太帝まゝ元始天王にも拜謁れと云ふ。天皇太帝とは。伊邪那岐大神を申し。元始天王ぞは。皇産靈大神を申せり。是らの委き由よしは。太古傳を更あり。三神山考にも。諸書を引て考證せり。既に第二詞に注せる説をも立返り見て知べし。彼老子を始め。名高き仙人さちの。皇国に來り。其印可を受て。生籙に載され。此神域に住る事は。今悉く數ふるに暇あらぬ。蹟の。かれ国籍に所見へさる事は。今悉く數ふるに暇あらぬ。

斯かく如く外國くの人をらか。我が皇神れ道を修し得て。神仙の位を賜をア。此神域ア住をれも多う侯ア。其神域ヨ生ウミて。然る神域ア生りをしも得知らを。儒佛の狡意を先とし。生涯ヨノカギリそれ非を曉サトらば。芻狗行尸れ倫ふて世を終侯人れ多犯は。最も悲しく憐アハレむ居き事ア加し。但し学者の道ア学ばざる人を憐れむ心れ同じき故ア。かく欺きる欺きれ誰もをめれど。已が幽冥神仙の考説ヨ於ては。古今ふ人の明らを得ざアし事を明らし得て。其を人ふも開示せむと。論ふ説ある故ア。其欺きも亦古今れ学者の欺きとは甚く異ヨして。其切れるヨと。胸をしア火ア心もえ。骨髄ヨり火出るばうアの歎あるを。哀れさる欺としも。想い知るむ人もがあ。ちて右ふ論ふ如く。二柱神くち。外國くをも經營まして。土地異ア生ばア産物まく異種を生じ。殊ふ國柄ア合せ。其時ふ應じて。

教示し給ア侯事れ多う侯る城。其事物をし。悉く本域ふ傳アて。識ある人ふ取捨せし免給ひ。その外国ヨ傳へ給いし事どもれ。大概を云はむヨ。経世・治国・人倫の道を更あり。天文・地理・易ト・暦法・文字・音律・医薬・方術・軍陣・悉それ。緼奥を傳ア給へり。是をもて大国主神を。外国ヨても御名かわく。皇国ヨても七ア。故大名持命とも白せしあり。かく其國くを。ア。の御名なり。故大名持命とも白せしあり。かく其國くを。みア皇朝ふヨアて仕奉ラ志免給はむの神慮と見えて。人世をあアては。崇神天皇れ御世ふかれ大物主神を御[illegible]アて。大迦羅國の人を來朝せしめ給ア侯事を始めふて神功皇后ふ神あち憑坐て。韓を伐し免奉ア給へる後。その外國國ヨアア産物ども獻ア。今は大ア諸蕃國れ事物ア漏さ侯を有まじく所思ある計アア集ふ事は。大名持少彦名神れ

外國ハ事執アヒ給ふ恩賴ふに依ておとあり。あわ此神等のみならず天地ハ神とも
ふ然ハ訪らい給ふと思ふる中よも須佐之男神の御子五
十猛神ことふ其を訪らい給ふ是を以てまさハ御名を韓
神とも申ハあり此神のおゝ韓招し給ふ
由は古史傳ふ委しく說ふるを見べし。ちて師の記傳ふ
言れあ所如く弘仁私記ふ少彦名神是造酒神也とあ所由
緒ふよりて。亦名を久斯神とも申せり其ハ神功皇后ハ酒
壽ひハ御歌ふ。此御酒ハ吾ガ御酒あらば久斯能神常世ふ
坐ハ石立ち少御神の釀し御酒。云くを詠坐る是あり久斯
とは酒の古名あ所ゞ。藥も同語と通ふ也ば久斯神をもや
ごて。藥之神をいふふ同じ。但し契冲ハ日本紀ふ奇神也
るふ依れど今ハ記傳の說ふよるそは久須理もを久
須祢とも云ひて貼ることを云ふより出さる語ふて彰より

活用ふる語ふハ非ざれむあり。此由は古史
第九十三段の傳ふ委く云へるを見るべし。抑酒はもを病
を療所料ふ造アヒ給アヒ所ふは非ざ免れど。久須理て姫名ハ
既ふ病を治ハ物の名を於アてハ。酒ふも病を治し心穢和
し咲しむる第一ハ能ある故ふ。久斯てふ名を專と負ふむ。
久須理ハ久斯まふ伎と約まる故ふ酒を伎
と云へり。御酒黑酒白酒あど云ふよて知べし。酒を慣しく久
志を云へる例ハ應神天皇の御歌ふ須くい許理賀迦美斯美岐
迩和礼惠比迩祁理許登那具志惠具志尓和礼惠比尓祁理
をあるを師說ふ事和酒咲酒ふ我醉ふ釈れふる具
志これあり須くい許理とハ百濟国よりて參來て酒を釀れふ所
人あアヒ谷川士清の說ふ醉ハ咲ふ出さる詞ふ但し少彦
らむと云へり今ハ御哥を思ふ信ふ然る所し。
名神の外國ふよりて渡アヒ來坐ざ所以前ふ高天原ふて天照大
御神ハ御語ふ屎あれを醉て吐散ハをあそと詔へる事ふの

アヒ。速須佐之男神は八俣大蛇を殺し給ふよ。酒を醉しめ給
ふ事ありしを。酒の始めを。少彦名神なりと有るを。疑ふ人
も有ぢられど。此神やがて宇麻志葦牙彦舅神にて。産靈大
神は長子に坐せむ。大御神より以前に。早く酒を造アて給い
しむも何ぞ疑をむ。まゝ或は天照大御神より以前には米
云を儲ざる徒も有あむ。然れど米のみあらば種々の物
にても酒を造ら例物多し。既に須佐之男神種々の菓を
集めて造アて給へるに非ずや。然也ばにて少彦名神をやく
是まゝ疑ふぢき事には非ずし。
酒は造り始めて。大國主神はゝ其を物し給ひ初と聞えて。
酒の事は此神に係ても申せアて。其は崇神天皇紀に高橋連
活日といふ人。大三輪社の掌酒を立て。天皇に御酒獻アし

時は歌に。此御酒は吾が御酒あらば和なる。大物主は釀し
御酒云々を詠めゝ是なアて。荒木田久老が酒之古名區志考
を云ふを糟交ぜる酒の事なし。大物主櫛甕玉命と申は御
名なり。大物とは御もれふて食物をいふ古言。櫛甕玉は酒甕
手向ふて。即食と酒を云ふと云ひまゝ大名持少彦名二
柱神の酒を造アて初め給ひしより。藥神と申し。藥神と申は
より。療病方を定むとは語り傳アしあるぢしを云。斯て醫
るは忌じき非説あり。其を古史傳を見て知アし。
藥は方。禁厭の法なるに。少彦名神むに孫と始を給ひ。大國主
神を毛ふ力を戮せて。皇國は更に。漢土を始め諸蕃國に
も傳へ坐しと聞えるアて。医藥禁厭の道とも。少彦名神む
アて知給ひしむを覺も。そは神典ある事実の趣にても自
然まもう聞え。今に至るまで此道に於ても。少彦名神をむ
孫と称なるも由縁あり事に大国主神の国造アて
給ふ時に病臥し給へる時に。始て温泉を物して活し給ひ

まゝ後世はやアの病あるゞ有ふは五條天神ふ鞍を掛しめ給ふ鯉おるをも思ふべし是をもて漢土の上古ふを酒醴は藥れ始ゑふて禁法を兼て病ゑ愈し記其は既く山田正珍ぬし多喜元簡主おども云アふ如く素問れ湯液醪醴論ふ岐伯曰自古聖人之作湯液醪醴者以爲備耳中古之世道德稍衰邪氣時至服之万全也云ひ張介賓が注ア湯液醪醴皆酒之屬と云へり周禮れ酒正職ふ辨四飲之物とて一曰清二曰醫ゑ鄭ふ注疏ふ清者醴清也醫者謂釀粥爲醴也集韵ふ醫濁漿也ゑゑ說文ふ醫治病工也从殹从酉殹病聲段玉裁云殹者瘞之省也酒所以治病也周禮有醫酒古巫彭初作醫と見ア

まゝ礼記ふ酒者所以養老也所以養病也とも見えうり古昔は巫祝れ徒もはら其道を傳アて禁法ゑ加ふて治療せし故ふ巫アふ从アて醫ふも作アア其人ふ巫醫とも云ひしゑアア是をもて彼土の古代ふ海經ふ巫彭巫抵巫陽巫履巫凡巫相ふゑ見えて郭注ふ皆神醫也と云ひまゝ後ふは医綏医和ゑとやうふ医字を冠らせても称へア其禁法を用ひし樣は說苑ふ上古之醫苗父之爲醫也以菅爲席以芻爲狗北面而發十言耳請扶而來與而來者皆平復如故ゑ見ゑ素問れ賊風篇ふ先巫知百病之勝先知其病所生者可祝而已也ゑ有ゑどを見て知ゐ侯し。まゝ移精変氣論ふ上古れ医ゑ必ゑ祝由せりとも見えまゝ苗父が十言ゑ疑ふく太昊氏十言の數ふ侯し北ゑ西土アて傳アア給ひし無上の神呪ふり。はゝ右ふ就て按ふふ西土ふて藥方れ名ゑ半夏湯桂枝湯葛根湯ふど號ゑしは酒を病アて用ふる事

城弘めて酒に草根木皮を浸し用ふる事と成りし故に其
古義をもて直に其主藥の名を取りて名けゝるゞ始なら
む其は今も忍冬酒苗香酒などゝ云ふゞ有るに準ずるも知
らぬ成り古今の医学者〻ち藥方の名に某湯と云ふを唯
て其論あきは古を稽へ煎る湯を云ふ事と心得〻るを見え
ざる麁漏と云ふべし。はゝ加茂翁説に酒を佐氣とも云
は古を飲めば心の榮ゆる故に名なて佐加延に約めるを
言れはゝ祝詞等に長御食能遠御食賚赤丹穂爾聞食故爾
成ぞ云ふ類の語を解なて赤丹と赤土成り其赤き餘光を
穂と云ふ万葉に紅に衣深まく欲れと著成ず丹穂ひや
人知ぬべきを云へり此も御孫命に御病あく大御顔の赤き

を申せりぞ言れゝふに據りて思ふに眞赤しむる物なる
故に佐祁とも謂ふを聞えゝあり〻〻是に依りて思ふに顔
語あるうま〻〻餘光まほやふと云ふを赤穂に省
ること大人の引れ〻る万葉の哥なて知べし。はて天竺
に醫道も禁法を藥劑とを兼用して其趣大凡そ漢土の療
法に同じきは豈に緣の事ならむや其に我が皇神に道を
傳へゝふに成ゞ故に我ゞ神典に故實に符合ふに成るに漢土に
醫書に中にも古き黄帝の内經神農に本經仲景の傷寒雜
病論あゞみ成ず我ゞ大神に道に起原せる物成り成ず
み思はむ人をまず古史傳に成ずに明らめ然し
て後に天竺の療法を知むを欲せば印度藏志を見るべく
漢土の古医道を見むと欲せば西蕃太古傳と志都能石屋
に就て見るべし。殊に志都能石屋は皇国の古医道より延

て、西土の古神僊は道ふ及び、う拔和ありて、偖そは傷寒論の自序漢は古方書は論ふも及べれむ。

ふ居世は士の方術と醫藥とふ神を留めざ除ぐ不覺ふ。

由を慇懃ふ誨せるを熟く思ひ。此事くはしく医宗仲景考ふ論アり。披き見るべし。

はゝかの徒然草ふ。世ふ居る人は知らでは有まじ記事と

を城云へる條ふ。人皆病ヲアア。病ヲ犯さ是ぬれば。其愁ひ忍び

がるし。醫療を忘除ぢらぢを云ひはゝ。醫術を習ふぢし。

身を養ひ人成ふ考け。忠孝の勤めも。醫ふ除らぢは有べの

らぢを言へるも然る言ふ是ば。醫業は人ふ是ぢとも。醫藥方

術ふ常ふ心ヲ懸べき事ふ。漢籍ヲは。かの小学ふ程伊川云く。病ヲ臥ヲ於ル床ニ者ハ。不可ヲ不ル知ラ医ヲ。と云へるふ。

比之、不慈不孝事親者亦不可ヲ不ル知ラ医ヲ。と云へるふ。

し有る者の。医を知らぢは有まじき由ふ。開示せる語類は。

諸書ヲ數ふるふ暇あらぢ。其は我しふも医藥は心得あくては。医師の選びも屈ふ。ぢ。ちて此二神

は齊衡三年ふ常陸國ふ依來まして。民を濟ふ爲ヲ歸來

ふ依由を御託し坐る御語を賴み奉アて醫師と有む人の

朝夕ふ其御靈を請祈奉アて。世人は病成視こぢ我が親ふ

ぢ子は病ふ視る如く悲み思いて濟はむ事を思は。世人も

はゝ其恩賴ふよアて。病無ら事を祈アて病ふならば靈幸い

坐して。醫療の速ヲ驗ふ是む事成も。祈ぢぢき事勿論ふ至。

外不志都能石屋ふ

拔きて見るべし。

○次ふ伊豆國は方ふ向は。右は如く拜み奉アて。

伊豆國加茂郡雲見嶽爾鎮座坐須磐長比賣神乃御前乎。

遙爾拜美奉里豆過犯須事乃有乎婆見直志聞直志給比、
堅石爾常石爾壽長在志米賜閑止畏美畏美毛祈里奉留、

此御社は神名式ふ伊豆國加茂郡ふ伊波乃比咩命神社と載され文德天皇紀ゑ嘉祥二年十月壬子伊豆國石奈比咩命神授從五位上となる。此より依れば磐長をイハナとも訓べし。ナガは比カを省けるなり。風神科長都彦神の長をもナと云へる。ちて式ふ伊波乃比咩は奈と乃と親しく通ふ音なれば彦。其例いと多うる。抑古れ比賣神は出自は伊邪那岐大神かの火神迦具土神を三段ふ斬給ひし其一段ふ生坐せる大山祇神の御女ふ坐す弟姫ふ木花之佐久夜毘賣命と申奈。斯て古ふ二柱の名義は師説ふ木花を字は意の如し。佐久夜を開光映ふ伎

波を切めて加ある所ゑ通はして久と云ふ彦。若子を和久碁と云ふ類なり。光映ふ波夜と云ふ下照比賣の哥ふ。阿那陀麻波夜を伊波夜と如し。万ゑ木花の中ふ櫻ぞ勝れて美ふ故ふ殊ゑ開光映てふ名を負て佐久良とは云へる。夜を良とは横ふ通音ある。小兒のいまさ舌れよくも聞らぬ頃れ言ふを。ラリルレロをヤイユエヨを云て。櫻ふも佐久夜と云ふ。これ自形ゑら通ふ音なれば彦。然れば此名も何の花をはあくまで木花れ咲光映あぐら。即主と櫻花ふ因て然云形所ゑ。やゝ後ふは木花と云て。即櫻ふよせるも有り。石長比賣を申ては堅石常石ふ長久き由ある。偖此二女れ御名石も木も主と山れ物ふて父神ふ縁ある所を有る。ふ古事記傳ふ就て見べし。ちて伊勢れ御鎮座傳記ゑ櫻大刀子神二座。雲華木座也。大ハ櫻樹也。従天上降居也。為華開也。

也。一座、大山祇命雙座也。苔虫神一座。櫻大刀子神與合力、靈石座也。をなり。此は[illegible]
佐久夜毘賣命は。天上より降れる櫻木の精靈ゝ坐ハ[illegible]
亦名を櫻大刀子神とも申して。其櫻樹をやがて其神體と
崇る。大山祇命は。それ御父なる故ゝ。相殿ゝ祭ふ由なり。[illegible]
れ古書等ゝ東方日出の国ゝ桑木とも扶桑とも称する
樹あり。其国を扶桑国といふよし見えたるは。即皇国の事
なて。其謂ある桑木とは。此櫻樹をいへり。斯て其樹後まで
山と化ぬ。其山を駿河国なる富士山是なり。此事委くは
別ゝ著せる扶桑国考ゝ於きて見べし。はゝ此より延て苔虫神と云ふを考ふ
ふゝ。此を疑ふく石長比賣命なりそは靈石座也をなれを
然る物なて。櫻大刀子神與合力と有るを。此二ばしら姉妹
ゝ坐ます云ふ。斯て苔虫てふ名義を。虫は借字ゝて生ふ

ふ。其を古今集賀歌ゝ。「我ぎの君は千世ゝ八千世ゝ迄石
れ。いはをを成て苔れむまで」を詠る苔れ生ゝ同
じ。さゝれとは。最少けき石を云ふ。一首の意を。然る少き
石の大なる磐と形て苔れ生まて。千世ゝ八千世ゝ榮
えおはせを云へるなり。此哥は必ず苔虫神といれ。然れど此
ふ御名ゝ。其神德を思ひて詠める哥なるべし。
二柱ゝ比賣神ゝ。大山祇神の御子ゝは坐せど實ゝは石
長比賣は。岩の精神ゝはゝし。佐久夜毘賣を櫻ゝ精神ゝ坐
を著明ゝ知られる。然るは父神大山祇神は迦具土神の
を。岩も木も主と山の物なるよをを御名ゝ負ましゝ。其
物くゝ靈代を為給ふなれども。伊豆国伊波乃比
咩命神社と同郡ゝ伊波比咩命神社と申すもなり。今は子
安明神を申ス。その御靈代を畏ゝ。子安貝の如き小貝
の。命しく凝ゝる狀ゝ石ゝ。まれと。秋小章ゝ
伊豆志ゝ記せり。疑なく同神を聞えゝり。ちて佐久夜毘

賣命を大刀子と申せり。神皇産靈神を大刀自神と申せり。自ら同く戸主に義ゆて。通く藝命れ后神ゆ御坐せばあり。其は神代紀ゆ皇孫通く藝命ゆてゆ天降まして筑紫れ高千穂宮ゆ御坐せゆゆ遙後ゆ笠沙の崎ゆ幸ませる時ゆ。いと美麗しき少女れ行逢るゆ。汝れ誰ゆ女ぞと問給ふゆ。吾は大山祇神の女ゆて。名は木花之佐久夜毘賣ゆ申せるゆ。皇美麻命まゝ兄弟ゆあやと問給ふば。我ゆ姉を石長比賣ゆ申せと答へ給ふ。爰ゆ皇美麻命。然らば汝吾ゆ妻とせむと詔ひて。大山祇神ゆ乞しめ給へり。皇御孫命れ天降ませる時れ甚く御幼稚ゆおはせる事ゆ初ゆ説くゆ如くあるゆ。神典の文面ゆては降り給ふと聞もあく。御妻問のゆりし趣ゆ見ゆ迄ど然ゆ非ら遙後ありし事。まゝ迹く藝命穂穂出見命。菁不合命。御三代の年數を日本紀ゆ一百七十九万二千四百七十餘歳ゆる百七十九万れ誇年ゆて。二千四百餘歳ある事ゆど已諦ゆ考へ得ゆる祕説ゆあり。それ別ゆ著せる弘仁歴運記考といふ物ゆ見て知るべし。

ゆて大山祇神いと歡びて其姉石長比賣を副て奉れり。然ゆて其姉れいゆ醜き故ゆ見畏みまして返し於くゆ其弟佐久夜毘賣をれみ留め給ひしゆば。大山祇神白し贈り給へるは。我ゆ女ゆ二人並ゆて進れる由れ。石長比賣を使ひ給ゆゆ天神の御子れ御命は。雨ふり風吹とも堅石常石ゆ坐む。木花之佐久夜毘賣を使ひ給はゞ。木花の榮ゆるゆと榮え坐むと誓ひて進ゆゆ石長比賣を返して。佐久夜毘賣を留め給ふれば。天神の御

子は御壽は。木花のおとと阿麻比坐おむや白し給ひ。石長比賣命も恥まして。青人草は命も木花の移ふ如く衰へむと白して泣恨み給へ。此世人は命長うらぬ縁なりや見えあり。此は事実をいさく約めて説されば奉くは古史成文を見るごし。師説は阿麻比は脆く堅固あらぬ意と聞えて甘と同言なり。今の俗語なも多く云ふと彩あるや有り。然るか此大山祇神まゝ石長比賣命は御語を古くも皇御孫命は。石長比賣を返し給ふ故を恨みて。呪詛し奉れる事と思ひ錯れあると聞えて。神代紀に。磐長姫大慙而詛之曰やく有れど。詛言ふは非ず。師の古事記傳なも其意をもて解れしるは此文ふ依られしるあれど委しらず。其はまだ通く藝命直ふ佐久夜毘賣をけみ見まして其を請給へるふ大山祇神そは比賣を贈り給ふ副て。石長比賣命をも進ぜ給ふる事は。濃き御心なりし事なり。神代紀の一書に。二柱の比賣さち秀起る浪は穂上に八尋殿を起て。機おあ居ませるを御覧じて。請ひふ遣り給へる様に記せる傳あれど。此傳は山神は比賣さちの浪は穂上に殿を起てと云ふ事なぞ。似なぬ説なれむ。然れば此は遂く藝命。その二少女を見まして請ませる證文とさし。然るは此時は御娉はしも。皇美麻命の后を立給ふ始めて。其生はさむ御子の御末は御壽命は。長き短き基縁と彩ふ大義なるふ。佐久夜毘賣はその御容貌こそ美麗しけ。其生まさむ御子は御末の御壽は。木花のおと移落は坐ぎ道理なり。然るは其を見感て請ふまふ。善こらぬ事とは所思者彩も。御詔を違へ奉進ぜて。石長比賣を

副給へるは。皇美麻命。もし此比賣を留め給ひむは。御容貌こそ醜悪りまし。其生はさむ御子は御末の御壽も。堅石は御容長久に坐ぢき道理をし。心に深く思慮をして進め給ひしかて。是ぞ大山祇神の御誓は御卜にをて久保。然れは裡に皇御麻命いらで佐久夜毘賣を返して石長比賣を幸さまへかしと。誓ひて坐しよとも言ふも更なり。然るに其心待し給ひて按ぢふ外まして。佐久夜毘賣を留めて。石長比賣を見畏みて返し給へる故に。推てそは醜悪き故進れる事なし。大く恥給ひ。まゝ木花のさくや美麗し。比賣を留め給ひれは。御末は御子の御壽は。長在まし事を数よてその如くは白し送て給ひしにをて。其事情よゝ其御語にも深く魂を入れて。此旨を思ひ解ふ

ぢし。かゝ為て謂ゆる呪詛の御語には非ざるなり。記傳の説をいまゝ此深意を思ひ得られぢとなり。かくて石長比賣命は。御容貌は醜き故に。返さまを給へ例を恥給ひ例は固よりて然も有ぢを事なるゝ。此もかの山城は別国の故事をも思ひ合せべし。是も皇美麻命は御世を詛ひ例御語には非ず。父神は御心を同く。佐久夜毘賣は幸ぢまを。其生まはむ御子の御末は更なりて世の人草は壽命も。それに肖ぢ次に移落ひぢむ事を。いや切に歎き憾みて。右は御語を有しにをて神典の本文に。恥恨嗟泣なども有るを以て。吾は幸給はざる故に。皇美麻命を恨み奉れは誰も思ふめれと。宇良美と云ふに悪み恨むるとは切に思ひて憾むるとの差別にをて。此二のうらに共に深く思ひ入りては怒て詈り嗟泣なども為らるゝも常有る事なり。此旨を深く思慮るべし。然れは本文に。此世人之命短折之縁也。

ぞ有るも。大山祇神。石長比賣に御語ふよりて。命短くあるしと云ふ事は非ず。石長比賣を辛さにて。佐久夜毘賣を幸ある故に。御子に御末の御壽。まる世人の命に短折く成れる事本ぞ。ぞ云ふ義ふ形も有り。斯るやうと無き事の因は。凡人に上を云ふ。男子の情とて。醜女を悪い美女を愛るに常形れぞ。男は女を配し。女ふ男を偶する事は。その道の原をもて思ふふ。子く生繼しむ。天皇祖神に道あれむ。実は其婦德をこそ擇ぶ。然しも美醜を撰むべきに非ざるを。美女に好み。美男を愛るも。亦やごと形き人情あれど。眞の道に志ならむ人に。此謂をも忘るまじき事とおぼゆ。然れむ彼もろこしの黄帝と云いし王の。嫫母と云る醜女を妃とし。諸葛亮と云いし人の。殊に醜女を求めて妻と為るを。其世の人ぞも。あざみ笑ふ由聞えるも。此二人ともふ。凡庸に徒に非ざれむ。密に思ふ旨の有ん故に。ちそ上代に天皇さちぞ。百歳ふ多く餘らせ給ふ。數坐はしり。人代ふては。御壽長うにし例形を少くも。神代の人の壽に。形に長くにし時を以て云ふ。甚く短きあり。通藝命にに後に。彦穂く出見命は。坐高千穂宮五百八十歳。ぞ有れども。此に以前ふ比。ぞて不長にしにに。斯て此時に事は。皇美麻命の御子に御末ふのみ係りて。世の青人草ふに係るはじ。道理あれども。天日嗣ちろし脊に天皇に御命の。長く坐ざ。ふ。は。天下に有も。人に命も。隨ひて短く形にしは。本にに然る。き理あり。日本紀纂疏ふ。皇胤蒼生短寿者。謂定業不可轉也。豈由磐長姫之詛乎と有るに。此を詛と見られしに非ある。耳あらば。師も信れさる如く。神に御典を説とて。其古傳ふは。從ぞして。此は由ふき佛説に信じ給へるは。何に惑ひ給ふる非説ぞや。万国の人に命の。

神代の如く長らぬ事なもはら此時より佐久夜但し然る毘賣命を幸給へるより緣ること云ふも更あり。道理は常あ原中ふ。人代と形アてもも倭比賣命武内宿禰味内宿禰阿閉臣事代あぎは如く數百歳は壽を保ちさる人も有原な。石長比賣命の殊ふ御靈坟幸へ給アて原故ちそ有ろ免。古き祝詞は類は更あア。上了云原古今集は歌の如く。石ふ準アて人の壽を賀ふ形ど全ちく の故事ふ叶アて原な。小緣の事より非ぎ。ふ形祝ぎ原を伊波布と云ふも。師說は有れど。石より活用せる語あらむと覺ゆる形ア。其な堅石常石と祝ふを始め石了准へて祝ふ語の多ぎが徒あらぎ聞ゆるより思ふふ形れて考アて出さる說形るが委しき事な古史傳より記ヒきば此より然れば壽命は長からむ事を欲はむるは常ふ體云ちば、

は養ひを熟く習行ひ形ぐも別て此比賣神は恩賴を祈願奉るぼき事形アア。老子ふ。死而不亡者壽。と云アアし成神の玄旨も。よく此比賣神の神德を知てぞ得らるめ原。但し躰は養性を行ふ法な。大名年遲少彦名神の由なりて皇国よりも外国へ傳アて坐さるを。已なやく曉アア得て志都能石屋より其由來より論ひ其方術ども。は殊より集記せる物もなアア。然るふ其国ぐへ了然る方術な傳へられど此比賣神の壽神ふ坐ことをし髮鬚より聞知れアと見ゆる說のおきな最もはらおき事ふこそ猶前條より說さ原說等をも思ひ合ぎぼし。ちて此比賣神は壽命を長在し免給ふ神ぞと云ふ說な。古今の書より見えば。余ぞ始免て言ひ出し說あ原ぐ。其は古史成文を集記せる頃形アア。諸書ふ其社は事のおきぐ慨さく覺ゆ原了合せて。何は所見ゆる事は無きど。已ぞ意と伊

豆國ゐや坐らむを所思しうば其國人は來れるゐ賴みて探索むるゑ。加茂郡ゐ雲見村と云ふあり。其村ゑ雲見山は淺間を稱ふ舊社あり。富士神の姉神ゆゑ壽命を守り給ふ神なりと云ふ由云い遣せる事ゐ疑なく此比賣神なめりを思ひて。於て神名式を見れば。伊波乃比咩命神社其郡ゐあり。國史には。石奈比咩命神とあり。然れば雲見山は淺間。かゝらを是なる事なるしを。歡喜ゐ不堪しうを。其地理を知ざるば。仍浚この彌て在りる時しも。近く寛政十二年ゐ。秋山章と云ひし人は著せる。伊豆志と云ふ書を。或人の見せる事ゐ。始めて。雲見山なる舊社の。式なる伊波乃比咩命神社ゐて。石長比賣神なる事をし思ひ浚めるりる。（そは伊豆志の說は加茂郡は所ゐ當郡雲見村ゑ淺間祠あり。御嶽山は嶺ゐ在り。式社なりを云傳ふ。磐長姫ゐ祀る故ゐ。此山ゐて驗列浚間は事を云ことを忌。其妹開耶姫と隙なるゆ故ゐ。まゝ當山の四方は峯巒周り遭て。唯仰て雲を見る故ゑ雲見といふ。毎年六月一日ゐ山開きあり。近村の男女潔齋して參詣を。此事伊豆納符にも見も。祢宜高橋氏と有り。）

ちて神名式ゐは淺さを給ゑれど。信濃國淺間嶽ゐも。此比賣神の坐ゐし。人は普祢く云ふは實の事ゐて。古く社の在りる所を。去ぬる天明三年ゐ。山は燒出なゑし時ゐ失ゝる儘ゐて。今は麓ゐ朽る鳥居のみ殘ゑて。神主も居く。僧山伏居ど。推て已が仕ふる神は古を云い成しは。其者ども。富士山は榮えを羨みゆ。於此山神なも淺間と申りゐ就て。開

837
10
86

耶姫命あるとと誣言(ヒヒゴト)して。人を欺くよし。去ぬる文政四年四月ゆ。其八日は毎(イツ)も。山開きせ日ゆるゆ會(アハ)むゆて參詣(マヰデ)ゆる時ゆ。沓掛(クツカケ)驛あ依古老等ゆ語ゆるゆ。あ不石長比賣神の御事も更あり。此山の事。まゝ此山よ此比賣神の坐ゆ配き由緒も所ゆ傳ふる説ゆて。古史傳よ委く記せり。いゆで此山ゆも。人せ普孫く詣(バウ)で奉らむ時もゆ。然思ふ由は故ゆて此(コ)ゆ述ぐるゆし。

837
10
86

曹山文庫